

「御維新ごいしん些ちと前まへだつて、芝しばの大門だいもん通りどほの足袋屋たびやに名代娘なだいむすめの美人びじんが有あつた。

其その時分じぶん、増上寺ぞうじやうじの坊さんばうは可恐おそろしく金かねを使つかつたさうでね、怪けしからないのは居周あまはり圍かたぎの堅氣かたぎの女房にようぼうで、内々ない／＼圍かこはれて居あたのさへ有あると言いふのさ。其その増上ぞうじやう寺じに、年少としわかな美僧びそうで道心だうしん堅固けんこな俊才えらいのが一人ひとりあつた。夏なつの晩方ばんがた、表町おもてまちへ買物かひものが有あつて、麻あさの法衣ころもで、ごそ／＼と通掛とほりかくると、其その足袋屋たびやの小僧こそうの、店前みせさきへ水みづを打うつて居あた奴やつ、太粗いけぞんざい雑ざいだから、さつと刎はねて、坊さんばうが穿はきたての新あたらしい白足袋しろたびを泥どろだらけにしたんだとね。……當時たうじは電車でんしやで、毎日まいにちの事ことだが。

娘むすめが夕化粧ゆふげしやうの結綿ゆひわたで駈出かけだして、是非ぜひ、と云いつて腰こしを掛かけさして、其處そこは商賣物しやうばいものです。直すぐに足袋たびを穿替はきかへさせると成なつて、豫かねて大切たいせつなお山やまの若旦那わかだんなだから、打うちたての水みづに褌つまを取とると、お極きまりの緋縮緬ひちりめんをちらりと挟はさんで、つくまつて坊さんばうの汚よごれた足袋たびを脱ぬがさ

うとすると、紐ひもなんです。・・・結むすんだやつが濡ぬれたと来て、急きふには解とけなかつた爲ために口くちを添そへた、皓しろ齒はで其その、足た袋びの紐ひもに口くち紅べにの附ついたのを見みて、晩ばん方がたの土つちの紺こん泥でいに、眞しん紅くの蓮れん花げが咲さいたやうに迷まよひだして、大だい墮だ落らくをしたと言いふ、尤もつとも墮だ落らくして還げん俗ぞくだらうさ。

此方こちらは悔かい悟ごして、坊主ぼうずにでも成ならうと云いふんだ。・・・いづれ精進しやうじんには縁えんがあります。自棄やけだから序ついでに云いふが、・・・私わたしは、はじめで逢あつた時とき、二十三とじの年とし・・・高かう等とう學がく校かうを出でると、祝いはひだと云いつて連出つれだして、村田屋むらたやで御飯ごはんを驕おこつたものがある。酒さけは飲のめず、畏かしこまつて煙草たばこばかり吐ふかして居あたので、愛想あいさつに一本ぼん、一寸ちよつと吸すつて、歸かへりがけにくれたのが、

「承知しやうち々々ち／＼。」と又また笑わらふ。

「でね、口紅くちべにがついて居あんだ。」

「氣障きまだ。」とお孝かうは手酌てしやくである。

「坊主ぼうずには縁えんがあるつて事ことだよ。」

輕かるく清ゆすいで盃さかづきをさしながら、

「處を又還俗さしてあげるから、もとツこだわね。可哀相に……。其のやはり小鰭の鮓を賣りやしないか。」

と倦怠さうに居直つて、

「もし、其の吸口は何う遊ばしたえ？……。後學の為に承り置きたい……。ものでござるな。……。よ。眞個に、」

「路傍では踏つけよう、溝も氣に成る……。一石橋から流したよ。」

「あゝ、崇りますねえ。そんな男を、私も因果だ。」

「恐入ります、が聞いて下さい。」

「聞いて遣はす、お酌をおし……。御免なさいよ。」と彌々酔ふ。

「然うだーあゝお銚子が冷めました、と恚う、清葉が、片手で持つて、襖の深い、すんなりとした膝を斜つかひに火鉢に寄せて、暖めるのに炭火に翳す、と節の長い紅寶玉を嵌めた其美しい白い手が一つ。親か、姉か、見えない空から、手だけで壓へて、毒な酒はお飲みでない、と親身に言つてくれるやう

に、ト其片手だけ熟と見たんだ。」

お孝が、偶と無意識の裡に、一種の暗示を與へられたやうに、掌を反らしながら片手の指を額に隠した。其の指には、白金の小蛇の目に、小さな黒金剛石を象嵌したのが、影の白魚の如く絡つて居たのである。

後で知れた、――衣類の紋も、同じ白色の小蛇の巻いた渦巻であつた。

「時に、隣の間の正成も、ふと音の消えた時、違棚の上で、チャチャ、と囁くやうに鳴いたものがある。聲のしたのは、蛤です。動いたと見えて、ガサ／＼と新聞包が揺れたらうでは無いか。」

「（榮螺と蛤です。．．．．．）
 思掛けない音に、一寸驚いた顔をした清葉に然う
 云つて、土産ぢや無い、汐干では時節が違ふ。．．
 ．．． 雛に供へたのを放生會、汐入の川へ流しに來
 たので、雛は姉から預かつたのを祭つて居る。．．
 ．． 先祖の位牌は、妹が一人あつて、其が齊眉く、
 と言つたんだね。

そして御姉妹は、と清葉が訊くから、（實は。）
 と出ました。．．．．． 實は、それに就いて、と言
 つたもんです。何に就いてだが、自分にも分らない。
 けれどもね。．．．．． 何に就いたつて、あし掛七年
 の間、唯一度も、氣障な、可厭らしい、そんな事を、
 言ひだせさうな機會と云つては一度も無かつた。

何時も、座敷の服装で、きちんと藝者と云ふ鎧を
 着て居るのから見れば、羽織で櫛卷だけに、客に取
 つては馴れ易い。覺悟は有つたし、サの字の

謎。．．．．．

實は、と目を瞑つて切掛けたが、からツきし二の

太刀が續きません。酌をして下さい、と一口に飲んで又飲んだ飲んだ。も、う一つ、も、う一つ酌いで欲しい、又、と立續けに引掛けても、千萬無量の思が、全然、早鐘の如くに成つて、ドキノ、と胸へ突上げるから、酒なぞ何處へ消えるやら。

口も濡れない處か舌が乾く。．．．又、清葉が何にも言はずに、那様に煽切るのも道理だ、と斷念めたらしく見えて、黙つて酌ぐんだよ。

あゝ、酔つた。」

と袖を擦並べたお孝の肩に、頭を支たさうに頹然と成る。のをお孝が向うへ、片手で邪慳らしく、トんと突戻した、と思ふと、其の手を直ぐに、葛木の膝へ。敷いて重ねた腕枕に、ころりと横に成つて、爪先をすつと流す、と靡いた腰へ、男の寝々衣の裾を曳いて、半ばを掛けた。．．．

「肝心な處、それから。」と自若として言ふ。

「弱つた．．．」

「私を口説く氣で、可うござんすか。眞個は、あの御守殿より、私の方が口説くには煩いんだから、其の積で、しつかりして。」

「破れかぶれは初手からだ。構ふもんか！・・・
・更つて（清葉さん）。・・・」
「黙つて顔を見ましたかい。」

「惚れたと云ふのが不躰であるなら、可憐いんです、床いんだ、慕しいんです。・・・私に一人の姉がある、姉は人の妾だつた。・・・戀こがれた若い男が有つたのに、生命にかへて或相場師の妾に成つた・・・其は弟の爲だつたんです。
私の父親は醫師だつたんだよ。・・・と云ふお醫師も、築地、本郷、駿河臺は本場だけれども、薬研堀の朝湯に行つて、二合半引掛けてから脈を取つたんださうだから、醫師の方では場違ひだね。
廣袖を着たまゝ亡くなると、看病やつれの結び髪を解きほぐす間も無しに、母親も後を追ふ。

姉は二十、私は十三、妹は十一で、六十を越して祖母さんが、あとに残つた・・・私と妹は奉公に出たんです。

姉は祖母をかゝへて、裏長屋に、間借りをして、其處で、何か内職をして露命をつないで居る。私が

小僧こぞうになつたのは、赤坂臺あかさかだい町の葉茶屋はぢやだつた。
膝ひざに島田しまだを乗のせながら、葛木かつらぎの色いろは白澄しろずんだ。
チヤラン／＼、と河岸通かしとほり、五郎兵衛町ごろうべゑちやうを出番でばんの金かな棒ぼう。

「忘れもしない、ずっと以前——今夜で言へば昨夜だね——雛の節句に大雪の降った事がある。其の日、兩國向うの得客先へ配達する品があつて、其は一番後廻、途中方々へ届けながら箱車を曳いて、草鞋穿で、小僧で廻つた。日が暮れたんです。兩國の橋を引返した時の寒さつたら、骨まで透つて、今思出して震へ了ふ。

何の事は無い、山から小僧が泣いて來たんだ。

人通りは全然無し、大川端の吹雪の中を通魔のやうに駈けて通る郵便配達が、唯た一人。．．．其が立停まつて、チヨツ可哀相にと云つた。．．．聲を出して泣きながら、聲も涸れて、漸と薬研堀の裏長屋の姉の内の臺所口へ着いた、と思ふと感覚が無い。

浸々と降る雪の中に、唯どしんと云ふ音がしたつて、姉が後で言ひ／＼した。

處が何うです。妹は妹で、其の前夜から奉公先を病氣で下つて、内で寝て居る。此が又悲惨でね。……聞いて見ると、猫の小間使に行つて居たんだ。主人夫婦が可恐い猫好きで、其の爲に奉公人一人給金を出して抱へるほどだから、其の手の掛る事と云つたら無い、お剩に御祕藏が女猫と來て、産の時などは徹夜、附つ切。生れた小猫に、すぐに又色氣が着くと、何と何うです、不潔物の始末なんざ人間なみに爲せられる。……處へ、妹が女の子の癖に、豫て猫嫌ひと來て居たんだものね。死ぬほどの思ひで、辛抱はしたんだが、遣切れなく成つて煩ひついた。(少し變だ、顔を洗ふのに澄まして片手で撫でる、氣を鎮めるやうに。)と言つて、主人から注意があつたんだとね。

祖母は祖母で、目を煩つて殆ど見えない。二人の孫を手探りにして赤い涙を流すんぢやないか。

私は氣が付くと、其の夜、一後で妹の話聞いてぞつと飛んで出たが、猫行火に噛着いて居て、豆煎を頬張つたが、餘り腹が空いて口が乾いて咽喉へ通らないから、番茶をかけて搔込んだつて。

内職の片手間に、近所の小女に、姉が阪東を少々、
祖母さんが宵は待ぐらゐを教へて居たから、豆煎は
到來ものです。

（白酒をおあがり、晉ちゃん、私が縁起直しに鉢
の木を御馳走しよう。）と、鉢落しの長火鉢の前へ、
俎と庖丁を持出して、雛に飾つた榮螺と蛤をおろし
たんだ。

重代の雛は、掛物より良い値がついて、疾に賣つ
た。有合はせたのは土彩色の一もん雛です。中に
ね、一漬島田に水色の手柄を掛けた一一年数が経
つて、簪も抜けたり、其の鬢の毛も凄いやうな、白
い顔に解れたが一重櫻の枝を持つて、袖で抱く
やうにした京人形、私たち妹も、物心覚えてから、
姉に肖て居る、姉さんだ／＼と云ひ／＼したのが、
寂しく其の蜜柑箱に立つて居た。

其をね、姿見を見る形に、姉が顔を合せると、其
處へ雪明りが映して蒼く成るやうに思つたよ。

姉が熟と視めて居たが、何と思つたか、榮螺と蛤
を舊へ直すつと、入かはりに壇へ飾つた其の人形を取
つて、俎の上へ乗せたつけ・・・

「千世ちゃん。」

と葛木の膝枕のまゝ、お孝が呼んだ。

「はあ。」と襖越しに返事した。お千世は、前刻
其處を見せられた次手に、・・・・・・（眠からう先
へお寝な。）と言はれたのである。そして寂寞して
今しがた、ずる／＼と帯を解いた氣勢がした。

四十

「寒く成つた、搔卷をおくれ。」

とお孝は曲げた腕を柔く疊に落して、手をかへた小袖の縞を、指に掛けつゝ男の膝。

「姐さん、私、帯を解いてよ。」

「生意氣お言ひでないよ、當も無しに。可いから持つといで。」

「うまい装をして、」

と膚の摺れる、幽かな衣の捌きが聞えて、

「御免なさいまし。」と抱いて出た搔卷の、それ

も緋と淺黄の派手な段鹿子であつたのを、萌黄と金

茶の翁格子の伊達巻で、ぐいと縊つた、白い乳房を

夢のやうに覗かせながら、ト跪いてお孝の胸へ。

襟足白く、起上るやうにして、ずるりと咽喉まで

引掛けながら、

「貴方、同じ柄で頼母しいでせう、清葉さんの長

襦袢と。」

學士は黙つて額を壓へる。

「姐さん、枕よ……」

「不作法だわ、二人で居る處へ唯た一ツ。」

「知らない、姐さんは。」

「持つてお歸り。」

「はい。」

と立つて、脛をする／＼と次の室へ。襖を閉めよ
うとして一寸立姿で覗く。羽二重の紅なるに、緋で
渦巻を絞つたお千世の其の長襦袢の絞が濃いので、
乳の下、鳩尾、窪みに陰の映すあたり、鮮紅に血汐
が染むやうに見えた。――。俎に出刃を控へて、漬島
田の人形を取つて据ゑた其話しの折の所爲であらう。
凄さも凄いが、艶である。其の緋の絞の胸に抱く
蔽の白紙、小枕の濃い淺黄。隅田川のさゞ波に、櫻
の花の散敷く俤。

非ず、此時、兩國の雪。

葛木は話したのである。

「姉の優しい眉が凜と成つて、顔の色が蠟のやう
に、人形と並んで蒼みを帯びた。餘りの事に、氣が
違つたんぢやないかと思つた。」

顔の色が分つたら祖母さんは姉を外へ出さなかつ
たらうと思ふね。――兄弟が揃つた處、お祖母さん

も、此の方がお氣に入るに違ひない、父上こ、母上の供養の爲に、活ものだから大川へ放して来よう
よ……

で、出たつ切、十二時過ぎまで歸らなかつた。

妹が涙ぐんで、（兄さん、姉さんは？ 見て来て下さい。）と言ふ。私も水へ飛込み兼ねない勢で、臺所へ出ようとすると、姉は威勢よく其處へ歸つた。……

白鳥を提げてね、景氣よく飲むんだつて……
當人既に微酔です。お待遠様と持込んだのが、天麩羅蕎麥に、桶餛飩。

女二人が天麩羅で、祖母さんと私が餛飩なんだよ。考へて見ると、其の時分から意氣地の無い江戸兒さ。

其の晩、豫て口を利いた濱町の骨董屋の内へ駈込んで、（あい。）と返事をしたんだつて。

浅草、花川戸の、軒に桃の咲く二階家に引越して、都鳥の鼈甲の花笄、當分は島田のまゝで、祖母さんと妹が其處へ引取られて、私は奉公を止して、中學校の寄宿舎へ入る。續いて白筋の制帽と成つて、姉

の思おもひ一つひとなんだ。かみわざで助たすけられるやうに、金きん
釦たんの制せい服ふくと漕こぎつけた。」

「……迄は、先あ可かつたんです。……
 ・・處が、其の後祖母が亡くつた時と、妹が婚禮を
 した時ぐらゐなもので、可懐い姉は、毎晩夢に見る
 ばかり。……私には逢つてくれない。二階の
 青簾、枝折戸の朝顔、夕顔、火の見の雁がね、忍返
 しの雪の夜。それこそ、鳴く蟲か小鳥のやうに、ど
 れだけ今戸のあたり姉の妾宅の居周圍を、あこがれ
 て彷徨つたらう、……人目を忍び、世間を兼
 ねる情婦でゞも有るやうに。――暗號で出て来る妹
 と手を取つて、肩を抱合つて、幾度泣いたか知れま
 せん。……姉は恥かしいから逢はぬと歎く。
 女の身體の、切刻まれる處が見たいか、と叱るんだ
 ね。

其の弟の身に成ると、姉は隅田川の霞の中に、花
 に包まれた欄干に立つて、私を守つて居るやうでも
 あるし、紅蓮大紅蓮と云ふ雪の地獄に、俎に縛られ

て、胸に庖丁を擬てられながら、救を求めて悶えるとも見える。……

死ものぐるひに勉強をしたよ。

大學へ入ると言ふ、其の祝ひだ、と云つて、私を

村田屋へ連出したのは、姉の旦那だ。

其の時清葉を見ました。

心の迷ひか、濟まん事だが、脊恰好、立居の容子が姉に肖然。

此の方は手形さへあれば、曲りなりにも關所が通られると思ふと、五度に一度、それさへ半年の間なんだ、……小遣を貯めるんだからね。……また藝者の身に成つて見りや、迷惑な事は夥多しい。

お孝は黙つて頭を掉つた。

「姉の方は、天か地か、まるで幽明處を隔つ、遠い昔のものがたりの中に住むか、目近に姿ばかりの錦繪を見るやいうだらう。同じ、娑婆に、おなじ時刻に、同じ槍物町の土地に、たゞ町を離れて、本郷の學校の門と、格子戸を隔てたゞけで住んで居る筈

の清葉さへ、夢に見ても夢でさへ、遠出だつたり、
用達しだつたり、病氣たつたりして逢へないんだも
のね。半年の間熟と目を塞いで居て、お茶屋の二階
で目を開いて、ドキノゝする胸を壓へるのが其の仕
儀なんだ。一度も夢で泣いたのは……」
天井を高く仰いで云つた、學士の瞳は水の如し。

「何處か……私の寄宿舎の二階と向合ふ、
同じ高さに川が一筋……川が一筋……
で、夢だらう。水は其の下を江戸川の（どん／＼）
ぐらゐな流れで通る。向う岸に二階がある。表だけ
見えて、欄干が左右へ……真中に榎の大樹が
あつて仕切る、其の二階がね、一段低く成つて流に
臨んで、一つ高い座敷が裏に有りさうなんだ、夢だ
からね、お聞き……いや聞いておくれ。」

其の左右の欄干の、向つて右へ、婀娜と掛つて、
美しい片袖が見える。ト頬杖か何か、物思はしい風
情で、熟と此方を視めるらしい、手首が雪のやうに、
ちらりと見えるのに、顔は榎に隠れたんだ。榎は何
處か、深山の崖か、遠い驛路の出入境に有る、繁つ

た大な年経る樹らしい。

其處へね、むく／＼と動いて葉を分けて、ざわ／＼と枝を踏んで、樵夫が出て来た。花咲爺の晝にあるやうな、あゝ、

と横を向いて卓子臺を幽に拊つて、

「前刻、西河岸で逢つた植木屋・・・ね、一寸肖て居たよ。取留めは無いのだけれども。

其爺さんが、コツン／＼と斧を入れる。が、斧の音は、あの、伐木丁々として、百里も遠く幽だのに、一枝、二枝、枝は、ざわ／＼と緑の水を浴びて落ちる。

「

「三枝、五枝、裏搔いて其の繁茂が透くに連れて、段々、欄干の女の胸が出て、帯が出て、寢着姿が見えて、頬が見えて、鼻筋の通る、瞳が澄んで、眉が、はつきりと成る。縋毛がはら／＼とか／＼つて島田鬘が見えた。

川の水が少し渺として、月が出たのか、日が白いのか、夜だか晝だか分らない。……間が凡そ何のくらゐか知れないまで遠く成る、と其の一段高い女の背後に、すつくと立つた、大な影法師が出た。一段高いのに、突立つたから胸から上は隠れたが、人とも獣とも、大な熊が蔽はれかゝるやうに見えたんだがね。」

「一寸待つて！」

お孝の怯えたらしい慌しさ。が沈んで力ある聲に、學士は夢から現の世に引き戻されて、

「え、と驚く。」

「此處を抱いて居て下さい。」

其の聲は、最う静であつた。搔卷越に、お孝は學士の手を我が胸に持添へて、

「さあ、話しておくんなさいな、――身に染みるわねえ。」

「たわいは無いんだよ。．．．すが／＼しいが、心細い、可哀な、しかし可懐しい、胸を絞るやうな驛路の鐸の音が、りん／＼と響いたので、胸がげつそりと窪んで目が覚めるとね、身体が溶けるやうな涙が出たんだ。」

其の二階越の女が、何うしても姉なんだ。いや清葉だった。然もつい近頃の事なんだよ。」

「．．．．．」

「話が前後に成つたんだがね、．．．．．夢を見たのは、姉が最う行方知れずに成つてからです。」

「行方知れず？．．．．．と手を支く音。」

「私が兎に角、今の學校を卒業すると、妹には代々の位牌を、私には其の――組の雛と、人形を記念に残して観音様の巡禮に、身は亡きものと思つておくれ、――妹に――達者でおくらし、――私に、晉さん御機嫌よう――」

妹には夫がある。

此の行方を探すには、私が巡禮に出なければ成らないんだ。

が、それは今出来兼ねる。

雖然、夢にも快く逢へる事か、似た人にさへ思ひのまゝには口も利けない。七年越し（私は姉が欲しい、・・・お前さんが欲しい、清葉さん。）と清葉に云つた。

今夜思切つて言つたんだ。唯他人でありたく無い！が、いま此の二人は、きやうだいに成り得る世界を持たん。夫婦に成りたい。一所に成りたい、唯他人ではありたく無い。しかし様子を見ても大抵分る、此は肯入れてはくれないだらう、斷然斷らるゝに違ない！私は、お前さんから巡禮に成る、少くとも行方知れずに成る、杯をうけて下さい。」

「御守殿は何と云つて？」と言は烈しく、搔卷はすらしとして居る。

「清葉は、すつと横を向いて、襦袢の袖口をキリ／＼と噛んだ。」

「私は胸が迫つたよ。・・・清葉が、聲を掠

ませて言つた。……（お察し申します。）

「へえ。」

「（貴方の姉さんが私でしたら、貴方に何とおつしやるでせう。貴方は姉さんにお聞き下さいまし。私には母があります、養母です。）と俯向いたが、起直つて、（母に聞かなければ成りません。……・また私には子があるんです。其の子の父があるんです。一人極つた人があれば、果敢ないながら藝者でも操を立てねば成りません。藝者の操、貴方お笑ひなさいまし。私は泣いて、其のお別れの杯を頂きませう。）……」

「あゝ、言ひさうなこつた。御守殿め、チヨツ。と膝を丁と支くと、颯と搔卷の紅裏を翻す、お孝は獅子頭を刎ねたやうに、美しく威勢よく、きちんと起きて、

「でも、有繫に土地の姐さんだねえ。」

四十三

「もし／＼、貴女様、もし・・・」

此處に葛木に物語られつゝある清葉は、町を隔て、屋根を隔てゝ、彼處に唯一人、水に臨んで欄干に凭れてイむ。・・・男の夢の流では無い、一石橋の上なのである。が、姿も水も其の夢よりは幻影である。

唯、小腰を屈めて差覗き、頭を揺つて呼掛けたのは、顛巻も尚だ除らないまゝの植木屋の甚平爺さん。「今頃、何をしておいでなさります、お一人でこんな處に・・・はゝゝ、」

と底力の無い愛想笑で、

「いや、も、う、人様の事をお案じ申すと云ふ効性もござりません。・・・お助けを被りました。お禮を先へ申さねばなりませんのでござりました。

はい、先刻は何とも早や、お庇で助かりました。頓と生命拾ひでござります。それに又、お情深い貴女様、種々と若衆たちまで、お優しいお心附を下さい

まして、お禮の申上げやうもござりません。」

「あゝ、植木屋さん。」

と云ふ．．．人を見た聲も様子も、通りがゝりに、其の何となく悄れたのを見て、下に水ある橋の夜更、と爺が案じたほどのものでは無い。

「今、お歸りなんですか。」

「はい、えゝ、貴女からお心添へ、と申されて、途中で又待伏せでもされるやうな事があつては成らねえ。泊れ、世話をせう、荷なりと預つて遣らうと、恚う云うて下さいましたが、何、前後の様子で、私尺を取りました寸法では、一時赫として手を上げましたばかり。然して意趣遺恨の有る覺えとてもござりませず、．．．何また、此の上に重て亂暴をしますやうなれば、一旦は些と遠慮がござりまして故と控へましたやうなものゝ、いざと成れば、何の貴女、唯打たれて居りますものか。向脛を搔拂つて、ぎやつと傾倒らしくれますわ。」と影辨慶が橋の上。固より好む天秤棒、眞中取つて擔ぎし有様、他の見る目も覺束無い。

つけ景氣の廣言さへ、清葉は眞面目に憂慮ふらし
く、

「でも、お年寄が、危いぢやありませんかね、喧嘩は唯當座のもですよ。一晩明かしてお歸りなされると可かつたのにねえ。」

「はい、それに實は何でござります、……大分年數も經ちました事ゆゑ、一時半時では、誰方もお心付の憂慮はござりませんが。……貴女には、何をお祕し申しませう、私は其の、はい、以前は矢張り此の土地に住ひましたもので。」

「まあ、」
「えゝゝゝ……忤が相場ごとくに掛りまして分散、と申すほど初手から然したる身上でもござりませぬが、幽には、御覺えがあらうも知れませぬ、……元數寄屋町の中程の、もし、へゝゝ、煎餅屋の、はい、其の時分からの爺でござりますよ。」

「あら、お店の前の袖垣に、朝顔の咲いた、撫子の綺麗だつた、千草煎餅の、知つて居ますともーまあ、お見それ申して濟まないことねえ。」

はずんだ聲も夜とゝもに沈んで聞えて靜である。

「滅相めつさうな、何なんの貴女あなた。お忘れわすれ下くださるのが功德くどくでござりますよ、はい、でも私てまへは粗ざつとお見覚みおぼえ申まをして居をります、たしか……・・・瀧たきの家やさんのお妹いもう

御ご……・……」

「え、小女ちひさい方はうよ、お爺ぢいさん、こんなに成なつて……・……お可懐なつかしいのね。」

四十四

「御主婦さんは、」

「養母ですか。息災ですよ。でも、めつきり弱りました。」

「私、陰ながら承つて存じて居ります。姉さんが、お亡くなりになりましたさうで。あの方はお丈夫で。……貴女はお小さい時から悪戯もなさらず、何時もお弱くつておいでなさりましたが、然し、まあ、御機嫌よう、御全盛で。」

「否、全盛處ではござんせん。姉が達者で居てくれますと、養母も力に成るんですけど、私がこんなですからね。――何ですよ、何時も身體が弱くつて困りますの。」

「お見受け申しました處でも、些と蒲柳なさり過ぎますで。」

何やら、もの思はしげな清葉の容子を、最う一度凝めて視て、

「尤も柳に雪折なし、却つて御心配の無いものでござります。でござりますが。」

爺さんは天秤を潛るが如く、腰を極めて、一息寄

る。

「其のお弱い貴女が、又・・・何で、今時分、こんな處に夜風は毒の、橋は冷えます。私なんぞ出過ぎましたやうでござりますが、お案じ申すのでござりますよ。」

「難有う、・・・身投げぢやないの、お爺さん。」

「滅法界な、はツノ。」

「でも、眞個は投げてても可いんです、今夜あたり。」と微笑んだ、が、笑顔の氣高いのが凄いやうに見える。

「滅相至極も無い。」

「親身に心配して下さるのを私、串戯を云つて濟みません。眞個身でも投げさうに、それは見えましてせうとも。一人で、こんな處に茫乎して。」

實はね、お爺さん、宵からお目に掛つて居た客が、歸りがけに此の橋から放生會をなすつた品があるんです。――昨日はお雛様のお節句だわね――其の蛤と榮螺ですつて。」

「はい、成程。」

「殿方ばかりでなさるんでは、故とらしくも聞えますが、其の方は御姉さんの御遺言。．．．まあね、．．．遺言と云つた譯なんですとさ、私も姉が亡く成つたんです。

何ですか、可懐くつて、身に染みて成らないのに、少々仔細が有りましてね、最う其の方とも此切、お目に掛られないかも知れなく成つたの。七年以來、夢にまで、眞個に夢を見て頂くまで、鼻屑に．．．
・・思つて．．．下すつたのに。」
袖を落して悄るゝ手に、鐵の欄干は痛々しい。

「私．．．最う御別離をお見送り申し旁々、切めて、此の橋まで一所に來て、優しい事を二人でして、活きものゝ喜ぶのを見たかつたんですけれども、二人ばかりの朧夜は、軒續きを歩行くのさへ謹まねば成らないやうに、もう久しい間．．．私ねえ、躡けられて居るもんですから、情ないのよ。お爺さん。お恥かしいぢやありませんか。其のね、（二人で來る。）と云ふのさへ、思出さねば氣が付かない迄、好きな事、嬉しい事、床しい事も忘れて居て、お暇乞をしたあとで、何だか頻に物たりなくつ

て、三絃を前に、懐手で熟と俯向いて居る中に、漸つと考へ出したほどなんですもの。

私許でも、眞似事の節句をします。其の榮螺だの蛤だのは、何うしたらうと、何年越かです、ふツと、其も思出すと、屹と何かと突包んで一所に食べたに違ひない。菱餅も焼くのを知つて、其が草色でも、白でも、紅色でも、色の嗜好みは忘れて居る、・・・あゝ、何と云ふ空蝉の女に成つたらう、と胸むねが一杯に成つたんですよ。」

「お地藏様の縁日だし、次々と云つては失禮だけれど、其方と御一所に、お参詣をしながら、貝を流しに來られたら、何んなに嬉しかつたらうと思ひますとね、．．．それなり内へ歸る氣に成れなかつたもんですから、後を慕つたやうに見に來ました。お爺さん、其の方は、随分、私に思切つた、殿方の口からでは、嘸ぞ仰有りにくからうと思ふ事さへ、打明けて下すつたのに、私は女で、女の口から言つて可い、言はねばならない．．．今、唯、お前さんに話をした、一所に此處までお見送りがしたい、と其れだけさへ、口へは出せない身なんですもの。

大抵お察しなさいまし。．．．小兒のやうな罪の無い、そして其より、酔いも甘いもよう知つて、浮世を悟つたお老人は佛様、何にも隠す事は無い。．．．私には、小兒の親、旦那があります。何いうせ女房さんや兒があつて、浮氣をなさるくらゐな人、妾てかけは他にもある。珍らしくも無い私を、若い妓に見かへないで瀧の家一軒世帯の世話

をしてくれますのは、棄てる言分が無いからです。
落度があれば其切、まことに頃日の様子では、内々
ぢや持扱つて、私の落度を捜して居るかも知れませ
んもの。大一座でゞもあるなら知らず、差向ひでは、
串戯も思切つては言へませんわ。

那様に、だらしなく意氣地なく、色戀も、情も首
尾も忘れたやうな空洞に成つたも、燃立つ心を冷し
／＼、家を大事と思ふばかり。其の家だつて私のぢ
やない。．．．．ねえ、お爺さん。」

と面を背けて、
「養母へ義理たつた一つばかりなのよ！．．．．
亡く成つた姉に、生命がけの情人が有つて、火水
の中でも添はねば成らないけれど、借金のために身
抜けが出来ずー以前盗人が居直つて、白刃を胸へ
突きつけた時、小夜着を被せて私を庇つて、びくと
もしなかつた姉さんが、義理に堰かれて逢ふことさ
へ出来ない辛さに、私を抱いてほろ／＼泣く。」

出生は私、東京でも、静岡で七つまで育つたから、
田舎ものと言はれやうけれど．．．．其の姉さん
を持つたお庇に、意地も、張も、達引も、私は習つ

て知つて居る。

其の時に覚悟をして、可厭で可厭で成らなかつた、旦那の自由に成つたんです。又然うして、後々までも引受ければ、養母が承知をして、姉を手放してくれたんですもの。……

ちやんと養母に約束した、其の時の義理がありましたから、自分ぢや、生命も随意には成りやしない。

お爺さん、私や藝者のかざかみにも置かれな

い……意氣な人には御守殿だ、……奥さんだ、お部屋だつて言はれます。」

はなじろみながら眉の昂つた、清葉の聲は凜とした。……途中でお孝の三人づれに行逢つたを爺は知るまい。が、言ふ清葉より聞く方が、ものをも言はず、鼻をすゝる。

「心に思ふ萬分一一、其の一言は云はないでも、姉の身ぬけに憐う／＼と、今云つた義理だけは、私は其の人に言ひたかつた、言ひたかつたんです。」

と思はず縋つて泣くやうに、聲が迫つて、

「ですけれど、他人は知らず、私たちが、然うした人に、此の事を打明けては、死んだ姉に恩を被せる、

と乗つてる蓮の臺が裂ける．．．姉は私に泣いてませう、泣いてくれるのは嬉しいけれど、氣の毒がられては、私は濟まない。

坊主に成る、とまで眞實に愚に返つて、小兒のやうに言つた人に、．．．私は堪へて黙つて居ました。．．．」

四十六

爺さんは、先刻打撲された時怪飛んだ、泥も拂はない手拭で、目を拭くと、はツと染みるので、驚いて慌しいまで引擦つて、

「他所目には大所の御新造さんのやうに見えます、其の貴女が、……矢張り苦界、孰れ苦の娑婆でござります。それにつけましても孫が可愛うござりますので、はい。」

沈めて、静に、

「お孫さん？……」

「え、女の子でござりまして。」

「まあ、私は些とも知りません。」

「御尤でござりますとも。……未だ胎内に居ります内に、唯今の場末へ引込みましてな。」

「では、私の静岡と同じだわね。それは、まあ、

お楽しみ。」

「否、處が何うして、處が何うして。」

と頭を掉つて、下して有る天秤に梱りながら、

「大苦みなわけでござりまして、貴女方と同一と申すと口幅つたい、其の數でもござりませんが、……稲葉家さんに、お世話に成つて居りますので、はい。」

「まあ、お孝さんの許に、……些も私知らなかつた。」

「はい、彼方の姐さんも、あの御氣象で、よく可愛がつて下さいます、が、願へますものならば、貴女のお手許に、と其の時も思つた事でござります。否、不足を言ふではござりません。藝者と一概に口では云ひ條、貴女は、それこそ歴乎とした奥方様も同じ事。一人の旦那様にちやんと操をお守りなされば、こりや天下第一本筋の正しい道をお通りなさる、女の手本でござります。彼娘にもな、あやからせたく存じますので。」

「飛んでもない、お孝さんこそ可い姐さん。あゝでなくては不可ません。私は何も、曲んだり拗ねたりして、恚う云ふのではないんです。お爺さん、色でも戀でも無い人に、立てる操は操でないのよ。……一人に買はれる玩弄品です。大人の

手に遊ばれる姉さま人形も同じ事。」

ふと言絶え、嘆息して、

「此處で榮螺を放した方は、上の壇に榮螺が乗つて、下に横にして供へられた左裯の人形を、私とは御存じないの。」

と、半ば亂れた獨言、聞かせぬつもりが聲が曇る。

「何も浮世でござりますよ。」

と分らぬながら身につまされて、爺さんはがつくりと蹲んで俯向き、もう一度目を引擦つて、

「何の眞似は出来ませいで、切めて藝ごとで、

勤まるやうに成れば可いと存じますよ。貴女なぞは

何が何でも、其處が強味でいらつしやいます。憂さ

も辛さも、絲に掛けて唄つてお了ひなさります。藝

ごとくも貴女ぐらゐにお成りなされると、人の樂みより

御自分のお氣晴しに成ります。……中にも

笛は御名譽で、お十二三の頃でございましたらうか、

お二階でなさいますが、私ども一町隣、横町裏道

寂と成つて、高い山から谷底に響くやうでござりま

したよ。」

「パイノ、笛の麥藁ですかえ、．．．．あんな事を。」と、むら雲一重、薄衣の晴れたやうに、嬉しさに打微笑む、月の眉の氣高さよ。

「あの、時分の事を思ひますと、夢のやうでござります。此の頃でも、御近所だと時々聞かれますのでござりませうがな。」

「可い鹽梅。」

とやゝ元氣に、

「幸と聞えやしませんよ。．．．．でも笛だけは、もう何時も、帯につけて居ますけれども、箱部屋の間へ密として置くばかり。七年にも八年にも望まれた事はありません。世間ぢや誰も知らないのに、お爺さん、ひよんな事を言出して、何だか胸があつく成つた。笛が動いて胸先へ！．．．．嬰兒のやうに乳に響く！ 何時でも口を結へられて、袋に入つて居るんだから。」

と命を抱く羽織の下に、屹つと手を掛けた女の心は、錦の綾に、緋總の紐、身に引きしめた臙の顔に、彩ある雲が、颯と通る。

眉を照らして、打仰ぎ、

「．．．．世に出て月が見たいんでせう。．．

「吹きはしませんよ。」
とすらりと抜いて、衝と欄干へ姿を斜めに、指白々と口に取る。

あゝ、七年の昔を今に、君が口紅流れしあたり。
風も、貝寄せに、おくれ毛をはら／＼と水が戦ぐと、
沈んだ榮螺の影も浮いて、青く澄むまで月が霽れた。
と、西河岸橋、日本橋、呉服橋、鍛冶橋、數寄屋橋、
松の姿の常盤橋、雲の上なる一つ橋、二十の橋は一
齊に面影を霞に映す。橋の名所の橋の上。九百九十
九の電燈の、大路小路に残つたのが、星を散らして
玉を飾つて、其の横笛を鏤むる。

清葉は欄干に上々しい。

甚平は手拭を鷲掴みで、思はず肩を聳かした。

「吹奏まし、／＼。何の貴女、誰、誰が咎めるも
ので。こんな時。．．．．不忍の池あたりでお聞
き遊ばすばかりでございます。」

「勿體ないこと。．．．．」

と笛を袖へ、又うつむいて消れたのである。

河童の時計の蒼い浪、幽な水音。どぶりひと

つ、
・
・
・
・
—
時^じであらう。

稲葉家のお孝は冷く成つた、有合はせの猪口を呼
吸つぎに呻、と一口。・・・で、薄ら寒いか兩
袖を身震ひして引合はせたが、肩が裂けるか、と振
舞は激しく、風采は華著に見えた。

が、すつきりと笑ひながら、

「それぢや、清葉さんばかり縹緞がよくつて、貴
方は、だらしが無いんだわね。」

「先あ、然うなんだ。」と葛木は、打傾いて頬に
手を置く。

「先あぢや無いぢやありませんか。立派に斷られ
たに違ひない。」

「そりや違ひない。」

「振られたのね。」

「ふられました。」

「ポイント。」

「何も然うまで凹ますには當るまい。」

「嬉しいねえ。」

小兒らしいまで胸を揺つた、が、何故か氣が立つて胸の騒ぐのを、然うして紛らしたやうである。

葛木は、煙草の喫さしを火鉢に棄てた。

「其だがね・・・」

「未だ負惜み？」

「唯話さ。」

と苦笑して、

「別れに獻した盃を、清葉が、些と仰向くやうに、天井に目を閉いで飲んだ時、世間が最う三分間、も音を立てないで、死んで居て欲しかつた。私の胸が、此の心が、何う成るか其が試して見たかつたが、ドシンばたん、と云ふ足音。隣室の酔客が總出ちに成つて、寝るんだ、座敷は、なんて喚いて、留める藝者と折重なつて、此方の襖へばた／＼と當る。何を、と云つてね、其の勢で、あ！・・・開けるぞ、と思ふと、清葉が、膝を支直して、少し反身で、びたりと壓へて、（お客様です。）

然う、屹として言い《つたんだよ。（誰だ。）と怒鳴ると、（清葉がお付き申して居ります。）と手に觸つた撥を握つて、すつと立つた——藝妓のひそ

めく聲がして、がた／＼と其處らが鳴つて静まつたがね……私は何だか嬉しかったよ。」

「情人らしく扱はれたやうな氣がして？ そんな負惜みをお言ひなさんなよ。」

軽く卓子臺を掌で當て、

「卑怯な、男のやうでもない。」

「否、そんな意味ぢや決して無いんだ。恥を祕して貰つたやうでさ。不出来をして女に振られた、戀の奴の、醜體を人目から包んでくれた氣がしたから。」

「人目が何うして、そんな事ぐらゐ藝者が貴下、もしか其が旦那だつたら、清葉さんは何うするたらう……一寸、此處へ、もしか私の男が、出刃庖丁か拔身でも持つて、蒼く成つて飛込んだら、私は何うすると、貴下思つてるの？ 否、吃驚する事は無い。私だつて其のくらゐな覺悟はして居る。」

大丈夫、然うすりや貴下の上へ、屏風に倒れて背に成つて、私が突かれる、斬られて上げるわ。何の嫉妬の刃物三昧、切尖が胸から背まで突通るもんですか。一人殺される内には貴下は助かる。兩方遁げ

るから危いんだわ。ねえ、一寸、

と、じり／＼と膝で寄つて来たが、目が覺めたや

うに座を三し、

「あら、何の話をしたんだらう、・・・・あゝ、

然う然う。」

お孝は何氣なく頷いて、

「清葉さんがお庇ひ遊ばしてーまこと、お豪い

藝者衆でいらつしやいます。」

「眞個、私は、しかし、」

「しかし何うしたのさ。」

「姉に、姉の袖で抱かれた氣がした。」

「葛木さん。」

其のまゝ衝と膝を掛ける、と驚いて背後へ手を支
く、葛木の瘦せた背に、片袖當當て裳を投げて、

「そんなに姉さんが戀しいの。人形のお話は、私
も聞いて泣いて居ました。眞個に貴下、そんなぢや
情婦は出来ない。口説くのは下拙だし、お金子は無
さゝうだし、」

「謝罪する。」

「口説かれるのも下拙だし、氣は利かないし、跋

「は合はず、機は知らず、言ふ事は拙し、意氣地は無し、」

「堪忍し給へ。」

「から、だらしは無いけれど、たゞ一つ感心なのは惚れる事。お前さん、惚れ方は巧いのね。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「情婦が無くつて、寂しくつて、行方の知れない姉さんを尋ねるツてさ、坊主になんか成らないやうに、私が姉さんに成つて上げませう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「御不足？ 清葉さんでなくつては。」

「那・・・・・・那樣事は・・・・・・あゝ、息が

塞るよ。」

「死んでお了ひよ。こんな男は國土の費だ。」

「酷い。」

と云ふ時、とんと突飛ばして、すつくり立つ、と手足を残して燃ゆるやうに見えた。パチンと電燈を消したのである。

力の籠つた、情の聲。

「一寸、（サの字。）が見えなくつて？ サの字

よ、私、葛木さん。」

「お孝さん。」

と僅に言ふ。

「暗い中でも、姉さんに見えませんか、姉さんにしてくれませんか。自惚れてゝ？一寸自惚れだ、と思ひますか。清葉さんでなくつては――不可いの、不可いのかい。」

「眞暗だ。私は、眞晴だ。……。」

「まだ、まだ／＼あんな事を。清葉さんでなくつちや、不可いの、不可いかい。」

「顔が見たい、お孝さん。」

「贅澤だよう。」

と婀娜な聲。暗中に留南奇がはつと立つ。衣摺の音する／＼と、霎時して、隔ての襖に密と手を掛けた、ひらめく稻妻、輝く白金、きらりと指環の小蛇を射る。

「眞個の、貴方の姉さんは私は知らない。清葉さんなら恐れはしない。藝で行けなきや、容色で、……容色で行けなけりや藝事で、皆不可なけりや、氣で負けないわ。生命で勝つ。葛木さん、

見て頂戴。
「

とすらりと開ける、と翠の草に花の影を敷いて、
霞に鴛鴦の翼が漾ふ。

「あゝ、お千世は？」

と葛木が言った。其は影も見えなんだ。

「枕を持つて、下階の女房の中へ寝に行きました

た、一度でも藝者と遊んで、其のくらの

な事が分らない。――さあ、ちやんとして見て頂戴、

サの字が見えない？ 姉さんに肖ない？

えゝ、焦りたい。」

と襖に縋つて、暗い方へ退る男と、明く浮いた枕

を見交はず。

「姉さんで可愛がられるのに不足なら、妹にまけ

て可愛がられて上げませう。従姉妹に成つてなかよ

くませう。許嫁でも、夫婦でも、情婦でも、私、

まけるわ、サの字だから。鬼にでも、魔にでも、蛇

體にでも、何にでも成つて見せてよ、藝人ですも

の。」

と裳を揺つて拗ねたやうに云ひながら、ふと、床

の間の櫻を見た時、酔つた肩はぐたりとしながら、
キリと腰帯が、端正と繋る。

「何の、姉妹に成るくらゐ、皮肉な踊よりやさしい筈だ。」

搔卷の裾を渚の如く、電燈に爪足白く、流れて通つて、花活の其の櫻の一枝、舞の構へに手に取ると、ひらりと直つて、袖にうけつゝ、一呼吸籠めた心の響、花ゆら／＼と胸へ取る。姉の記念に蚩劣るべき花柳の名取の上手が、思のさす手を開きしぞや。

其の枝ながら、袖を敷いた、花の霞を裳に包んで、
夢の色濃き萌黄の水に、鴛鴦の翼に肩を浮かせて、
向うむきに潰島田。玉の緒揺ぐ手柄の色。

「葛木さん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「人形が寂しい事よ。」

四十八

お孝は黒繻子の襟、雪の膚、冷たさうな寢衣の装
 で、裾を曳いて、階子段をする／＼と下りると、其
 處に店前の三和土に壘乎と立つた巡査に、一寸目禮
 をして、長火鉢の横手の扉を、すつと縁側へ出て行
 く。

其處が中庭に成る、錦木の影の浅い濡縁で、合歡
 の花をほんのりと、一輪立膝の口に含んだのは、五
 月初の遅い日に、じたらくに使ふ房楊華である。

其の背後に、座敷が見えて、花は庭よりも其處に
 咲いて、眉の緑の年増も交る。

唯、下地子らしい十二三なのが、金盞を置いて引
 返して来て、長火鉢の傍の腰窓をカタンと閉めたの
 で、お孝の姿は見えなく成つた。

とばかりで、三和土に立つた警官は、お孝が降り
 て来た階子段を斜に睨んで、髯を捻る事専なり。で、
 少時家中が寂然する。

一體、不斷は千本格子を境にして、やけな奥女中の花見ぐらゐ陽気な處へ、巡查と見ると騒動が豪い。謹むのでは無い笑ふので、キヤツノ、クツノ、各自が彼方此方、中には奥へ駈込んで轉がるまで、胡蝶と鸚鵡が笑ふ怪物屋敷の奇觀を呈する。

事の起因を按ずるに、去年秋雨の降くらす、奥の座敷に、女ばかり總勢九人、然も二組に成つて御法度の花骨牌。軒の玉水しとノ、ノと鳴る時、格子戸がらり。

「御免。」

と掛けた聲が可恐く嚴い蠻音。薩摩訛に、あれえ、と云ふと、飛上るやら、くるノ、舞ふやら、平胡と坐つて動けぬやら。

座敷では袂へ忍ばす金縁の度装の硝子を晃々さした、千鳥と云ふ、・・・・女學生あがりで稲葉家第一の口上言が、廂髪の阿古屋と云ふ覚悟をして度胸を据ゑて腰を据ゑて、最一つ近視眼を据ゑて、框へ出て、はツと悪く落着いた切口上。

「別に其のでございます。相變りました事はございませんです。」と、戸籍係に立ごかしの三ツ指を

極めたと思へ。

「羅字が出来たけえ、……持つて来たですッ。」

「何だね、羅宇屋さん、裏へお廻り。」と、婆やが水口の障子で怒鳴ると、白磨竹を突着けられた千鳥の前は、拷問の割竹で、胸を操られた體にぐなりとした。

鍋焼餛飩は江戸兒で無い、多くは信州の山男と聞く。……鹿兒島の猛者が羅宇の嵌替は無い圖でない。然も着て居たのが巡査の古服、――家鳴震動大笑。

以來、戸籍調べ、とさへ言へば、食ひかけた箸を持つて廻る埒の無さ。當區域受持の警官も、稲葉家では、（笑ふ。）と極めて、其の氣で髯を捻るのであつたが。

今日のは大に勝手が違つた。

「姉さんは内ぢやらうで。」

「はあ、あの……」

「是非、直接に逢ひたいんぢや……取次を

頼むです。」

小女が一度、右の千鳥女史と囁き合つて、やがて
巡査の顔を見い／＼、二階に寝て居たのを起した始
末。笑ひ掛けたのは半途で壓へ、噴出したのは嚙込
んで、いやに静かな事仍て如件。

幽な咳してお孝が出た。わがねて突込んだ婀娜な
伊達巻の端ばかり、袖を、辻つて着流しの腰も見え
ないほどしなやかなものである。

「失禮をいたしました。」

「は、あんた覚えて居らるゝかね。」

唐突に言ふのが其で、お孝は一寸分り兼ねつゝ、
黄楊の横櫛を壓へたのである。

四十九

巡查は掌を向うへ扱いて、手袋を外して、片手に絞つて、更めて會釋する。

「一寸分りますまい、ぢやらうがね、……先達で、三月四日の午後十二時の頃に逢うたのです。」

「あゝ、一石橋の、あの時の。」

お孝は軽く傾いて居たのが屹と見直す。

「多目でした、いや、其の節は失敬ぢやつた。」

「否、私こそ失禮を。」

「むゝ、聊か其の失禮で無いこともなかつたです、ね、ひやツ、ひやツ。」と壁に響くが如き力ある笑聲、笑ふのに力が有つて、敢て底意は無さゝうである。

お孝は顔を洗つたばかりの、縁起棚より前へする挨拶とて、いつになく、もじ／＼して、

「ついね、お白酒の持越しで、酔つて居たものですから、ほゝゝ。」

と蒼、ぐらゐな内端な聲。

「お茶をよ、誰か。」

「然う云ふ心配をされては困る。……官服の手前もある。お宅などで餘り世話に成つては不可んです。……雖然、一寸此處を拜借します。」

「さあ何うぞ、……貴官お上り遊ばしては。」

「此處で結構です。」

小女が心得て手早く座蒲團と煙草盆。

「御免下さい。」と外套を抱へたまゝ、ガチリと佩劍の腰を捌いて、框の板に背後むきに、かしつと長靴の腰を掛ける、と帽子を脱いで仰向けにストンと置いて、

「何は、一寸々々來らるゝかね。」と髯を捻る。

「誰方……でございますか。」

「何は、大學の國手は？」

「薩張……と目が働いて、頬が緊る、お孝は注意深い色である。」

「全然お見えに成らんですかね。」

「否、時……偶。」と、膝で二つばかり掌

を軽く合わせる。

「今度お逢ひでしたら、貴方から、私に、託を一つ頼まれて下さらんぢやらうかね。」

「はあ、お目に懸りました節は。――ですが、何時またお見えに成りますか。」と瞻らるゝ目を外して言ふ。

「別に急ぐと云ふ件では無いです。――今名刺を上げます。で、私が職務としてゝは無。一人として、私一人として、ぢやね、・・・・・・非常に先達ては失敬した、詫をします、と貴方から能う言うて貰ひたいのぢや。實は其を頼みたうて、今日は私用のみで出向いて來たです。・・・・・・いや／＼一石橋の事のみではないです。」

實は、今週の金曜日、一昨日でした。私は非番だもんで、醫科大學へ葛木さんを訪問したです。可えですか。・・・・・・と云ふのはぢやね、先夜、彼の場合、貴女が不意に出て來られて、私が疑問の的とした、不審を實際に示して、證明をされたもんで、其れ以上追究は出來兼ね都合で手を放した。

尤も孰にせい、私が思うたほどの事件で無い、と

だけは了解したのぢやけれども、醫學士などは、出たら目ぢやらう。又、あの年配で、それが今日堂々たる最高の學府に氏名を列する一員であらるゝものがぢやね、……學問上、蛙の腸や、モルモツトの骨を新聞紙に包んで棄てるならば、幾分かいはれはある。それも必ずしもあるべき事實とは思はんのぢやがね。

榮螺と蛤、姉の志と云うて、雛にそなへたを汐に流す、——そんな事が私は斷じて信ぜんのぢや。」

と今も尚且つ信じないやうに、澁に朱を加へた赤い顔で——「信せんぢや」——

巡査は其處に注いで出した茶を、喫まず、じろりと見たばかり。

「事態、私も怪訝に堪へんもんで、早急とは無しに、本郷方面へ、同僚の筋を手繰つて捜りを入れると、葛木晋三と云ふ醫學士は如何にもあるぢやね、而してゞす、其は醫科に勤めて居らるゝが、内科、外科、乃至婦人科、何でも無いのぢや。大學内の其の、生理學教室に居つて研究をされつゝある・・・」

と眞顔に熟と打傾いて、左の手の自脈を取りつゝ、
 「まるで此の方には關係ない。純粹の其の學者ぢやとある。で、尚ほ怪いですわい。其の晩の擧動なり、・・・あの餘り・・・貴方の前ぢやけれど、風采の上らん、瘦せた、薄髭のある、背の屈んだ、恚う、突くとひよるひよるツとしさうな、人に口を利くにおどノゝする、初心らしい、易つばい、容子と云ふのがぢやね、

人品備はらんですぢやらうが、何うですかね、・・・きやツ、きやツ、きやツ。」

空咳きに咳入る如く、肩を揺つて高笑ひをする。

「さあ、」

と言つたが、ほゝゝ、とばかり、此の際困つたと云ふ片微笑みをして、一寸指先で疊をこすり状に、背後を向いて、も一度ほゝゝ、と莞爾すると、腰窓を覗いて居た、島田と銀杏返が、ふつと消える。

巡查は、乃ち髯を捻つて、

「怪しいものではあるまい。後暗い事は、其は無いのぢやらう。がです・・・あの晩の人間は名を騙つた者に相違無い、と何うしても疑はれて成らんもんで。好奇心にも驅らるゝですわ。非常に思切つて、醫科大學に刺を通じて面會を求めたです。そりや、貴方、通常服で、そして小倉ぢやが袴を着けて出向いたけえな。

何うか思うたが、取次いだ小使どんが、やゝ暫時あつて引返して、お目に掛らう言はるゝ、通れ、とあつて、廊下傳ひ方角を教はつて、而して其れから歩行き出したがね、――私は先年此岐阜縣下ですわ、飛騨の或山家邊僻に勤務した事があつて、深い谷陰、

高い崖に煙草の密造をする奴を検べに行つたのぢや
ね。其の節、路も無い處を、所謂、木の根巖角です
哩。時々藤蔓にぶら下つて、激流の空を綱渡などし
たが、いや、見當の着かぬ心細い事は、――門外漢
が學校の其の奥へ行く廊下傳ひは、奥山を歩行く所
では無かつたです。

日も西山に没して、前途尚ほ遙なりと云ふ、遠い
向うの峠見たやうな處に、大な扉の戸を、細う開け
て、背にして、すつくりと立つて、此方を出迎へて
居られた。峰の一本の松と云ふ姿に見えたのが、何
と驚いたねえ、あの晩の少い紳士ぢや、國手ぢやつ
たで。

ぴたりと留まつて、思はず、擧手の禮を施したで
すよ。常服では可笑いのぢやが。

すぐに此へ、と言はれて、大な扉を入ると、ズシ
ンと閉つたと思はれい。稻妻のやうに、目を射られ
たのは、室一杯に並んだ書架に、ぎつしりと並んだ、
獨逸語ぢやらうね、原書の背皮の金文字ですわ。

暮方の空に、此が何うですか。紺地に金泥の如く、
尊い處へ、も一つの室には名も知れない器械が、淨
玻璃の鏡のやうに、まるで何です、人間の骨髓を透

して、臍腑を射照らすかと思ふ、晃々たる光を放つ。
私は、よろ／＼と成つたで。あの晩、國手が、私
のために、よろ／＼と成られた如くぢや。何と、俗
に云ふ餅屋は餅屋ぢや、職務は尊い。」
と沈着に、腕を拱く。

「其の器械と、書架の有ると、國手兩室を占領して居らるゝ様子ぢやねえー傍には寢臺も有つたですよ。柱の電鈴を壓さると、小使どんが紅茶を持つて來るのぢやつた・・・」

私は卓子の向ひに、椅子を勧められて眞四角に掛けたのぢやが、硝子窓から筑波山の夕日が射して、其の生理學教室を■と輝かした中に、國手の少い姿が、神々しいまで見えた。

一應話を聞いたです。私もね、出來得る限り、行政の一員たる其の威嚴を保つてからに。然し、決して警官として訊問をするではありません。既に一石橋當夜の紳士と、生理學教室に於ける國手とが同一人である事を確めた上は、些少たりとも犯罪に對して何等其の疑ひは無いのであります。お話の如き事情に對する警官の經驗の爲に、云うて、其の室で飾ると云はれた、雛を見せて貰うたです。

國手、一個の書架の抽斗、其には小説の類が大分帙を揃へて置かれたー中から、金唐革の手箱を、

二個出して、其を開けると無造作に、莞爾々々、
から卓子の上に並いべられた。一錢雛ぢやね、土人
形五個なのです。が、白い手飾の、あの綺麗な手で
扱はれると、数千の操絲を掛けたより、もつと微妙
な、繊細な、人間の此の、あらゆる神経が、右の、
嚴肅な、緻密な、雄大な、神聖な器械の種々から、
清い、涼い、芬と藥の香のする室の空間を顫動させ
つゝ傳つて、雛の全身に颯と流込むやうに、其の一
個々々が活きて見える。・・・

就中、丈、約七寸許の美しい女の、袖には櫻の枝
をのせて、一寸うつむいた、慄然するやうな、京人
形。・・・髪は、

と言ひ掛けて、お孝の姿を更めて視て、
「貴方、貴方の其の髪と同一に髪を結うた人形ぢ
やがね。」

お孝は俯向いて、しゃんと手を支く。

「其は何と云ふ髪の結びかたですかね。」

「潰。・・・」

「はあ? ・・・何ですかね、覚えて置くで失
禮します。」と、手帳を出す。

お孝の上げた顔は、颯と瞼が染つたのである。

「あの、潰島田でございます、お人形さんの方は結構でせうけれども、此はまことに其の潰しの利きませんお恥しいんですよ。」

「否、潰しなんかきかんで可えです。貴方は既に葛木さんの。」

隅の階子段を見て空ざまに髯を扱いた。見よ、下なる壁に、あの麗の毛皮、大なる筒袖の、抱着いた如く膠頰とんて掛りたるを——

「巡查は心付いた目をお孝に返して、貴方、大抵の事は、此處で饒舌つて可えですか。或種の談話は憚らんでも構はんですかい。」

「え、／＼、と懷を廣く、一膝出ながら、些とも……お氣に入りましたら、私をすぐ、お口説きなすつても構ひませんの。」

「きやツ／＼きやツ。葛木さんの奥さん。何ないしてかい？……」

「まあ、そんな事こそ、先方さまが御迷惑です。」

「否、然し、其の積りで出向いて来たで。」

「羽織を。寒い。……そして私にも煙草を

美^び學^{ぎよ}

おくれな。
」

「さあ．．．．何の話ぢやつたかね、其處で。」
 「貴方、其の瀆島田に結つたお人形さんですわ。」
 「然やう、．．．．就中、其が、葛木さんの目
 と一所にはち／＼と瞬きするぢやね、――聲を曇ら
 して、姉と云ふ御婦人の事も言はれた――
 私は別世間を見ただす。異つた宇宙を見ただす。
 新しい世の中を發見して寧ろ驚異の念に打たれ
 た。．．．．吃驚したんぢやね、何の事は無い。

嘗て、其の岐阜縣の僻土、邊鄙に居た頃ぢやつた
 ね。三國峠を越す時です。只今、狼に食はれたと云
 ふ女の檢察をしたがね、．．．．薄暮です。日歸
 りに山家から麓の里へ通ふ機織の女工が七人づれ、
 見えですか。．．．．峠が最う一息で越さうと云
 ふ時、下駄の端緒が切れて、一足後れた女が一人キ
 ヤツと云ふ。先へ立つた連の六人が、ひよいと見る
 と、手にも足にも十四五疋の、狼で蔽被さつた。――
 身體はまるで蜂の巣です哩。

私は反對の方から上りかゝつたんでね。峠から駈下りて来た郵便脚夫が一人、(旦那、女が狼に食はれて居ります。)と云ひ棄てゝ、すた／＼行きをる。――あとで、其の顔を覚えとつたで、(何故通里かゝつて助けんかい。)・・・叱つた處で、在郷軍人でも無し仕方が無い。然う云ふ事も現在見た。

又、山の中に、山猫と云ふのが居る、形は嘗て見せんで見たものは無いと云ふです。唯深更に及んで其の鳴聲ぢやね、此を聞くと百獸悉く聲を潛むる。鳥が塙で騒ぐ。昔の狒々ぢやと云ふ。非常に淫猥な獸ぢやさうでね、下宿した百姓の娘などは、其の聲を聞くと震へるです哩、――現在私も、其は知つてる。

炭焼の奴が、女を焼いて食つた事件もある。

然う云ふ事は知つとるが、趣味と情愛の見聞が少かつたゝめぢやらうか、醫學士が生理學教室で、雞を祭る、と云ふは信じなかつた。――吹く風はなこそその關と思へどもですわ。」

と嘆息して、髯に掛けた指を忘れた。

「鎧の袖に櫻のちら／＼とかゝると云ふ趣も、私の其の了簡では嘘にせねば成らんのぢやつけえ。

恥入るですー 一人としてぢやが。」

巡查は、ずるりと靴をずらして、佩剣の鞘手に居直つたのである。

「で、國手に大に謝さうと思ふ處へ、五六人、學生とは覺えない、年配の、堂々たる同僚らしいのが一齊に入つてござつたで、機を考へて、其れなりに歸つたです。

此の意をぢやね、願はくは貴方から國手にお傳へのほどを偏に希望します。私は職務上の過失であれば責を負ふです。其は別問題として、ー 私は、貴方から御挨拶を願ふのが、尤も其の道を得たものと信ずるのぢや。

就てはです。私は没分曉漢の一巡查であるが、生理學教室に雛を祭ることに於て、一石橋の朧月一片の情趣を會得した甲斐に、緋緘の鎧の袖に山櫻の意氣の羨しさに堪へんで。

十年勤務の間、唯一の美學として、貴方に差上げたいものがある。

「奥さん。」

「言うても構ひませんな、奥さん。」

「嬉しいんですよ。」

と聲が迫つて、涙が美しく輝いた。

「一生に一度ですわ。」

「葛木の奥さん、……學位年齢姓名と並べて、（同じく妻）と認めた手帳の一枚です、お受取り下さい。」

出すのを取つて、熟と俯向く、……潰島由の、水淺黄の手柄のはら／＼と揺るゝを視ながら、冷めた茶碗を不器用な手つきで、取つて陰氣に一口、かぶりと呑むと、ガチリと立つて擧手した切、たゞの巡査に成つて格子を出た。

此の巡査が、本郷を訪問した時の光景は、彼が爰に物語つた通りであつた。それさへ、神境に白き菊に水ある如き言ふべからざる科學の威嚴と情緒の幽玄に打たれたのに――やがて仔細有つて、此の日の

午後、赤熊の毛皮を其のまゝ、爪を磨ぎ、牙を噛んで、喘ぐ猛獸の如くに成つて、生理學教室へ、日本橋から本郷を一飛びに躍り込んだ。・・・海産商會の五十嵐傳吾は、それは又思ひの外意氣地の無いものであつた。

大學の廊下を人立して、のさくと推寄せた傳吾が、小使に導かれて、生理學教室の扉に臨んだ時、呀、戀の敵の葛木は、籐の肱つき椅子に柔く腕を投げて、仰向けに長く成つて、寝ながら巻蓑を喫んで居た。・・・が、客來る、と無造作に身を起して、カタリと大床に靴を据ゑた。其の音さへ、訝するまで、高い天井、大空に科學の神あつて彼を守護する如くであるのに、搗て加へた學友が、五人の數、彼を取巻いて、恰も迷宮の奇き灰色の柱の如く、すく／＼と居合はせたのが、希有な侵入者を見ると、一齊に傳吾に瞳を向けた。知らずや、其の中に一人外科の俊才で、渾名を梟と云ふ。・・・顔が以たのではない。いかもの食の大腕白、嘗て御殿山の梟を生捕つて、雑巾に包んで、暖爐にくべて丸蒸を試みてから名が響く、猫を刻んでおしやます鍋、モルモ

ツトの附焼、聊か苦いのは、試験用の蛙の油揚げ
云ふ、古今の豪傑、千場彦七君が眞黒な服を着けて、
高い鼻に、度の強いぎら／＼と輝く眼で、ごさんな
れ、好下品、罷の皮をじろりと視て、頭から鹽を附
けたさうにニヤリと笑つた。――此の威にや恐れけ
む。

傳吾は扉の敷居口に、へた／＼と腰を抜くと、罷
の筒袖の前脚めいた奴を、もさりと支いて、土下座
して、

「途感をいたしまして。」

とばかり、口も利き得ず、すご／＼と逡巡して歸
つたのである。

仔細は云ふまでもない。……大概様子でも
知れよう。前夜から、稲葉家へ泊り込んだのが、其
の二階を去らず、お孝に愛想づかしをされて突出さ
れたのであつた。――

却説……巡査が格子戸を出ると、やがて×
×署在勤笠原信八郎とある名刺にのせた、(同妻。)
を熟と視て居た、稲葉家のお孝は、片手の長煙管

をばたりと落して、すつと立つと、頂いて、長火鉢
の向う正面なる、朝燈明の清く輝く、縁起棚の端に
上せた、が、黙つて伏拜んで、座蒲團に居直つた時、
眉を上げつゝ流眄に、壁なる罨の毛皮を見た。

「千世ちゃんは？」

煙草盆を引きながら少女が、

「お稽古ですの。」

「春子さん、夏次さん、千鳥さん、萩代さん、居
なさるかい。皆一寸来ておくれと、然うお言

ひ。……私、話したい事がある。」

「露地の細路、駒下駄で。」

カタノと鳴る吾妻下駄、お竹藏向の露地を、突
袖して我家へ歸る、お孝の褌は、幻の夜が深かった。

「姐さん、姐さん。」

と呼ぶ、可愛い聲。

一時、藝者の数が有餘つたため、隣家の平屋を出
城にして、桔梗、刈萱、女郎花、垣の結目も玉章で、
亂朶逆茂木取廻し、本城の欄干の青簾は、枝葉の繁
る二階を見せたが、近頃いはれあつて世帯を詰めて、
稻荷様向うの一軒につづめたので、隣家は恰も空屋
である。

其處まで戻ると、我家の格子戸前の木戸を
細めに開けて、差覗く島田を見た。

「千世ちゃんかい。」

お孝は、ずつと来て、年上の女の落着いた聲を沈
めて、

「何うおしなの、お前さん最う寝て居たんぢやないのかい。」

「え、寝て居たんですけれど、私、國手がお歸んなさるのを、姐さんが送つて出て、此の木戸で、何だか話していらつしやるのが寂しく聞えて、知つて居たんですよ。カタノと足音がして出ておいでなさいますから、あの、ぢや露地口までお送りなすつたんだ、然う思つて居ましたけれど、それにしては餘り遅いんですもの。」

何時までも、お歸んなさいませんし、それだし、あの、一度お寝つたんですから、姐さんは寢衣でせうのに、何うなすつた知ら。私、心配で。此處まで起きて来て、あの、通へ出て見ようと思つたんですけれど、可恐いでせう。それですから、あの、此處につかまつて震て居ましたの。」

「何だねえ、そんな弱蟲が、それぢや、来てくれ たつて何にも成りやしないぢやないか。」

と口では笑ひながら、嬉しい目で。其の癖もの案じの眉が顰む。軒の柳が靄の有る、瓦斯の燈暗き五月闇。淺黄の襟に頬白う、又、

雨催の五位鷺が鳴くのに、内へ入らず、お孝はイむ。

「何うかしたの、姐さん。」

「否、何うも爲やしないがね、私ね、何うしようかと思つて居るんだよ。千世ちゃん、一寸此處へ来て御覽。」

「はあ。」と、お千世は何の氣なし、木戸を内へギイと引く。

「静によ、誰か目を覺すと面倒だから。」

「あい．．．何、姐さん。」

「一寸、木戸の此の柱に、こんなものが貼つて有るだらう。」

お千世は、薄氣味悪さうに、お孝の袂に掴まりながら、直ぐ目の前なを、爪立つて覗くやうに、唯見ると、比羅紙の、凡そ二枚尻ぐらゐな大きさの眞中にぼつり／＼と筆太に、南無阿彌陀佛、と書いたのが、じめ／＼として、宛然、水から這上つた流灌頂の如く、朦朧として陰氣に見える。

「可厭、姐さん、何？ 一寸。」

お千世は息を切つて震へ聲。

「性が知れてるから些とも氣味の悪いことは無いんだよ。お聞き、先刻、國手が來なさがけに、露地口を入らうとして、偶と、そら、其處の松家さんの羽目板を見なさるとね、此の紙が、丁度、入口の取着きの處に貼りつけて有つたとさ。

巻煙草を買ふのだつけ、と其の拍子に氣が付いて、表の小母さんの許へ行つたんださうだけれど、最う寢て居たんだつて。

今夜は、來やうが遅かつたわねえ。」

五十四

「國手はね、それから仲通まで買ひに行つたんだとき。．．．．．そしてねえ、一本喫かしながら入つて來ると、見たばかりで、最う忘れて居たくらゐたつたのが、又ふつと氣が付いて、あゝ、此處に有つたつけど、お思ひの、それがお前、前の處には無くつてさ、同じ羽目板だけれども、足數七八つ、二間ばかり奥へ入つた處に、仇白く成つて字が見える、．．．．．紙が歩いた勘定だわねえ。」

「姐さん。」

「可恐くは無いんだつてばさ、此の娘は。」

とお千世の肩を抱込んで、

「何かお禁厭でゞもあるかいツて、國手がね、内私にお話しなの。．．．．．何でしせう、月日も、堂寺も記いて無ければ、お開帳の廣告もなからうし、別に、そんなお禁厭が有るツてことも聞きません。變ですな、．．．．．然う云つて居たんだがね。」

お歸りなさるのを、框まで見送つた時、私何だか氣に成つてね、行つて見ませうよツて、下駄を突掛けて出よ、うとすると、（お止し、密と那樣ものを

貼つて置いて、それを見たものに、肺病か何か當の病人から譲渡して、荷を下さうなんのつて、よくあるこつた。・・・お前は女だから神経を起すといけない、私は工面の悪い藪のかはりにや、大地震の前兆だつて細露地を抜けるのは氣に成らないから。)

串戲半分然う言つて、國手は平氣なだけどもね。もしか禁厭なら何うしよう、(貴方は擔がないでも、荷を見せて可いもんですか。・・・災難なら切て半分、私が背負ひませうよ。)とばたすた急いで格子をついて出ると、お前何んだらう・・・

そら此處へ來て居るのさ。

羽目を傳はつて、木戸へおいでなすつたんだわ。

私も慄然と總毛だつた。

はてな、字が殖えて妙な事が書いてある。前刻見たのは念佛ばかりで、こんなものは無かつたつて、

御覽。

と云ふ、南無阿彌陀佛の兩傍に、あひ／＼傘の樂書のやうに、(となへろ／＼／＼となへろ、)と蛞蝓の如くのたくり廻る。

「國手がね、（何だ、浄土が眞宗にも、救世軍が
出来たんぢやないか、）つて笑つたけれどね、・
・・私はドキリとしたんだよ。假名の形を一目見
ると分つた。お念佛を（唱へる／＼）。）ー覺悟を
しろーツて謎ぢや無いか。こりや、お前、赤熊の
爲業だあね、あの、鯁野郎の。」

「まあ、熊兄さん。」

「止しておくれ。」

はた／＼と袖を拂いて、

「身ぶるひがする。いつかお巡査さんの來なすつ
た朝、覺悟が有つて長棹に掛けてから門傍へも寄せ
つけない。其を怨んで、未練も有つて、穴から出た
り入つたり、此處等つけ廻して居るに違ひない。何
の男のやうでも無い。のツそりの蝦夷なんか、私は
何とも思はない。悪く形でも顯して見たが可い。象
牙の撥があるものを、拂き殺しても事は濟む。ー
國手の身のまはりをつけ廻されるんだと、ね、千世
ちゃんや、姐さんは本當に案じられる。」

角の紀田屋まで送つて行つて、車を然う云つて歸
して來たがね、獸は駈けるのが疾いやね、車にも乗

れば乗るだら、う。――泊めたかつたが、お肯きでなし、……」

とお孝は獨言のやうに云つて、

「途中で、又然うでも無い、新聞にお名前が出るやうな事なんぞ無ければ可いが、」

と氣を揉む頬の後毛は、寝みだれて尚ほ美しい、柳の絲より優しいのである。

「姐さん。」

お千世が顔を覗いて、

「縁起棚へお燈明をあげて、そしてお祈をしませ

うよ。私も拜みますわ。」

「嬉しい娘だね。」

と頬摺したが、襟を合せて凜として、

「お待ち、私、考へた。……お稻荷様へお百度を上げよう。」

とて見返る祠は、瓦斯燈の靄を曳いて、空地に蓮の花の紅いが如く、池があるかと浮いて見えゝる。

「數取りにはね。」

と云ふより早く、ぴり／＼と比羅紙を引剥が

す……

「此を裂いて紙稔にしようよ、——人を呪はゞ穴
二つさ。見たが可い。」

氣の立つたお孝は、褌を引上げるより前に、雨霽
の露地へ、ぴたと脱いだ、雪の素足。

意氣地も張も葉がくれの間に、男を思ふあはれさ
よ。鶴を折る手と、中指に、白金の白蛇輝く手と、
合せた膝に、三筋五筋觀世捻、柳の絲に、もつれ纏
るゝ、鼓の緒にも染めてまし。

あはれ、恚る時は、あすの逢瀬を樂みに、歸途を
案ずるも心ゆかし、寐られぬ夜半の待人掛ける、小
さな犬も拵へ交せて、お千世に背打たれて微笑みも
したが。・・・

柳の葉の散る頃は、——續いて冬枯の二日月、
鬢櫛の折れたる時は——

一口か一挺か

五十五

「――露地の細路駒下駄で。――」

男が口の裡で、フト唄つて、

「不可んぞ、此は心細い。」と、苦笑ひをしながら立直つて、素直に杖を支くと、其まゝ渡り掛けたのは一石橋月はないが、秋あかるく銀河の青い夜の事。其は葛木晉三である。

露地に吾妻下駄カタ／＼の婀娜な女と因縁のある、唄の意味も心細いが、お孝が投遣りに唄ふのは、勝氣と膽勇を示すものと云つて可い。其の口癖がつい乗つた男の方は、虚氣と惑溺を顯すものと、心付いた苦笑も、大道さなか橋の上。思出し笑と大差は無いので、此は國手我身ながら（心細い。）に相違ない。

其の虚に憑入る、魔はこんな時に魅す、とある。

今、橋の上を欄干に添つて、日本銀行の方へ半ば渡り掛けると、橋詰の、あの一石餅の、早や門を鎖

した軒下に、大な立ん坊の迷兒の如く蹲つて居た男がむく／＼と立つと、ざわ／＼と毛の音を立て、鼻息を前にハツハツ獣の呼吸づかひ。葛木の背後に迫つて、のそつと前へ廻ると、兩手を掉つた不器用な、意氣地の無い叩頭をして、がくりと腰を折つて、

「國手、お願ひ！」

と喘いで云ふ。

はつと一歩あとに退いて、立侍つて、見透して、
「何だ、何ですか。」

彼の影の黒く大なるに對して、葛木の手のカウスは白く、杖は細かつた。

「直訴であります、國手。」

「直訴とは……？」

「直訴とは、……直訴とは、切、切羽詰つたです、生命がけで、歎願をします。貴方を將軍家だ思つて、橋から青竹を差出します。俺は佐倉宗五ですのだから、え。此の願を聞届け遣はされりや、殺されても、俺、磔に成つても可いのです。で。國手。」

「何です。……唐突に、と云ふんだけれども、私はお前さんを知つて居ます。又、お前さんも知らないとは言はせませすまい。そしてお頼みと云ふのは何です。」

「國手、御診察が願ひてえだな。」

と、粗雑に太く云つた。が、口覚えに練習した、腹案の口上が中途で切れて、思はず地聲を出したらしい。……で、頭を下げ赤熊は橋の上に蹲る。

四五分では、話の鼻は着ないと覺つたらう。葛木は巻煙草を點けた。燃えさしの燐寸をト棄てようとして水に翳すと、ちら／＼と流れる水面の、他の點燈に色を分けて、雛の松明の如く、軸白く桃色に、輝いた時、彼は其處に、姉を思つた。潰島田の人形を思つた、榮螺と蛤を思つた、吸口の紅を思つて、火を投げるに忍びなくつて、一橋に棄てた。

此と齊しく、どろんとしつゝも血走つた眼を、白眼勝に仰向いて、赤熊の筒袖の皮擦れ、毛の落ち、處々、大なる斑をなした蝦幕の如きものゝ、ぎろ／＼と睨むを見たのである。

が同時に又、思出の多い此處の頼母しさを感じて、
葛木は背後に活路を求めると其の背を凭せた。
に、ひた、と其の背を凭せた。

葛木は従容して云つた。

「お前さん、診察が頼みたい？・・・然うすりや死んでも可い。そんな解らない謎見たいな事を言はないで、判然と、石か、瓦か、當つて砕けたら可いぢやないか。私も診察なら病院へ來給へなどゝ廻りくどいことは言はないから。」

「實際、願ひたい次第でして。就てはで、御覽の通り、着の着のまゝだ云ふうちにも、擦切れた獣の皮一枚だ、國手。雨露凌ぐ軒はまだしも、堂社の縁の下、石材や、材木と一所にのたつて居る宿なし同然な身の上だ、御挨拶も手續も何も出來ねえです、其處で以て直訴だ、生命がけで願えてえだな。」

「本當の診察なら、私は不可い。まるで脈を一つ採つたことの無い、自分の風邪をひいたのには葛根湯を飲んで、それで治る醫者なんだ。此方も謎のやうなことを云ふんぢやない。事實だよ。診察は、から駄目なんだよ。」

「決して其は脈を取つて貰ふには當らんです。で、唯國手の口一つだなあ。」

「口一つかね。」

「然うですわ。」

「何うするんですか。」

「四の五の無いで、唯一言、（お孝に切れる。）

云うて下さりや可いのですのだい。」

「大方そんな事だらうと思つたよ、．．．此

の診察は當つたな。」

葛木は莞爾しながら、

「折角だ、が、君、頼まれないよ。」

「何で頼まれん、何で。ありや俺の生命ですが。」

「私の生命かも分らんのだ。」

「俺の女房だ事、知らんのかい。」

「私は藝者だと思つて居るがね。」

「何でも可い。」

とドス聲で忙込みながら、

「素張切れてくれ、頼むたでな。」

「女に言へ、女に．．．先方で切れゝば其迄

よ。人に掛合はれて、自分の情婦を、退くも引くも

あるものか。」

「……自分の情婦。……え、堪らん、

俺の前でお孝の事を。……う、筋が引釣る、
身體が震へる。」

生命とも、女房とも思ふ女を引奪られた戀の敵に、
俺の口から切れてくれ頼むと云ふは、これ、よく/
の事だ思はんですか。」

女に云うて肯く程なら、遠くから影を見ても、上
衣の熊の毛まで轟々立つお前んに、誰、誰が頼む、
考へんかい。」

「私も同じことを言ひたいな。女が肯かないほど
のものを、男が掛合はれて引退がる奴がありさうな
事だと思ふのかい。」

「俺を人間だと思ふか、國手。」

赤熊はすつくと立つた。

「悪魔だ、鬼だ、狂人だ、虎だ、狼だ。……」

爲にならんぞ！」

「あ、其の上にもまた熊でも可いよ。」

「汝！」

葛木は欄干に杖を倒して、柔に手を拂いた。

「刃物を持つてるか。」

「むゝ、持たんことがあるもんだか。」

「二口あるか、二挺持つてるか。」

「何うするだい。」

「一口渡せ、一挺貸せ。――持たんのか。一本しかない刃物なら、暗撃にしろ。離れて狙へ。遠くから打て。前に廻つて、名告掛けて、生命の與奪をすると云ふに、敵の得ものを用意しない奴があるものか、はゝゝゝ、馬鹿だな。」

五十七

「あゝ、言はつしやる。」

赤熊は身構、口吻、さて、急に七つ八つ年を取つたやうに老實に力なく言ふのであつた。

「今言はしやつたは度胸で無いで。膽玉で無いですだ。學問の力だ。國手の見識ですわい。」

詫入りますで、はい。

固より將軍様に直訴する云うたほどです、はじめから國手の身體に向うて手を擧げうとは思はんのですれど、ものは發奮たで、赫としたでな。そりや刃物措け、棒切一本持たいても、北海道釧路の荒土を捏ねた腕で、此の拳一つでな、頭ア胴へ減込ますうと、．．．．ひよいと抱上げて、ドボンと川に搦める事の造作ないも知つたれども、そりや、あれを見ぬ前だ。

あれよ、．．．．あの、大學校の大教室に、椅子で煙草を喫んでござつた、人間離れのした神々し

い豪い處を見ぬ前だでーあれを見た目にや、こんな其の、土龍見たやうに成つて了うた俺が手で、危いことするは餘り可惜ものだ思ふ氣が、ふいと起つて何うにも出来ねえのですのたで。

其ともに、喃、國手、お前んの生命を搔拂ひさへすりや、お孝との扱が戻つて、早い話が舊々通り言ふこととを肯いて、女が自由に成る見込さへあればですだ、それこそ、お前んが國手でも、神でも、佛でも、容赦する氣は微塵も無いだ。

無いだ。が、お前んに逢つて、機嫌の悪い事でもあつた日には、家中に八ツ當りで、十言云ふことに、一口も口を利かぬ。愚に返つた苦勞女を何うするだね。お前んの身に異常がありや、女も一所に死ぬですだらうで、……然うなれば何う成るですた
い。

國手、俺は、あの女は生命より大事です、死なうにも死に切れん。生きとるにも生きとられん。

國手、顔を見られないくらゐなら、姿だけも見るが可えし、姿さへ見られんなら聲ばかりも聞くが増だし、其の聲さへも聞かれないなら、聲音でも聞い

て居たい。其の跫音にすら／＼と衣服の觸る音でも
せうなら、魂に綱をつけて、ずる／＼引摺り引廻さ
れて、胸を引搔いて、のた打廻るた。

お前ん、誰も知るまいし、又知らせるやうにもせ
んですだが、俺はお前ん、二階から突出されて、お
孝の内に出入りが出来なく成つてからは、天に階子
掛けるやうに逆せ上つて、極道、滅茶苦茶、死物狂
ひで、潰れかけた商會は煙にする、其が爲めに嬢々
は死ぬ。」

「女房がー死んだ。」と、學士は鋭く口早に言
返す。

「二歳に成つた小兒は棄てる。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「木賃泊りの天井裏に、晝は内に潜つて、夜に成
ると、雨でも、風でも、稲葉屋の周圍を、胡亂つき
廻つて、稻荷さんの空地に蹲んでも居りや、突當り
の黒堀に附着いて立明す・・・・然うして聲を聞
く、もの音を考へるですたい。」

「過日來から、隣の家が空いたです、此の頃では、
大概毎晩、あの空屋で寝て居るですた。」

「空屋でかい。」

と、驚いて云ふ。

「國手、お前さんは又毎晩のやうに、蛇が蟠を巻いて居る上で、お孝といちやついてござる勘定だ。」

が、俺の方は、おつけ晴れて、許して縁の下へ入れて置いて貰ふ方が、隠忍んで隣の空屋に潜るよりも希望ですだ。」

襟の邊を引搔くと、爪を銜へる子供のやうに、含羞む體に、ニヤリとした、が、其のまゝ、何を噛むか、むしや／＼と口舐づる。

「尚だ慾の言へば、お前んとお孝と對向で、一猪口飲む處をですた、敷居の外からでも可い、見て居たいものですだ。」

お孝を俳優で、舞臺だ思へば、何として居られても、顔を見て聲を聞く方が、木戸に立つて考へとるより増だからな。」

俯向いて半ば泣き、
「嫉み猜みは、未だ恚うまで惚れない内だと考へるで。」

初手はね、お前ん、喧嘩した事も、威した事もあ
るですだい。

現に國手、お前んの大學病院の何とか教室へ俺が
推掛けて、偉い人たちに吃驚して遁げて返つた、あの朝ですだ。忘れんですが。――稲葉家の格子へ
巡査が来て、お孝にお前んの身の上話いて、――何が嬉しい、……。俺は二階で聞いて膽魂が煮く
り返るに、きやつ／＼きやつ／＼と笑うて、情事の
免許状やうなもの渡いて歸つた。お孝が、直ぐに
内中の藝者を茶の室へ集めて、ですだ喃、國手。

（私は今日からおかみさん、然う思つて附合つておくれ。其のかはり、私も其の氣で附合ふから、借金なんか、まけて欲しい人には直ぐに目の前で帳消しに棒を引きますよ。）ーだ、お前ん。

其の勢で二階へ歸つて來ると、未だ顔も洗はんで居る俺を捉まへて、さあ、突然歸つておくれですだ。．．．．．藝者なら旦那が有らうが、何が來て居やうが構はない。それが可厭ならお止しだけれど、極つた人が出來た上は、片時も、寢衣で胡坐かいた獣なんぞ、備前焼の置物だつて身のまはりん六尺四方は愚なこと、一つ内へ置けないから、即座歸れ。．．．．．云うて生眞面目ですがい。

俺、はじめは笑つたです。が、怒つたですだ。愚痴言つた。．．．．．頼みもしたですのだ。

耳にも入れいで、（汚らはしい、こんな物を。）お前ん、お孝が蒲團を取つて向うへ匆ねると、其の時ですわい。豫て國手の事を俺嗅ぎつけて知つとつたで、お孝を威しつけてくれうとな、前の夜さり、懷中に秘いて居つたですれども、顔を見ると、だら

けて、はや、腑が抜けて、其のまんま、蒲團の下へ突込んで置いた、白鞘の短刀が轉がつて出たですが、お孝が見たでな。天道時節此處だ思つて、（阿魔覺悟があるぞ！）睨んだですだ。ばた／＼とお孝が立つて、占めた、遁げる、恐れたぞ。俺が勝つた、と乗掛つて、階子段の下口で捉まへたは可かつたですれど、何うですかい。

お孝は遁げたで無いですが。．．．あの階子は取外しが出来るだでね、お孝が自分でドンと突いて、向うの壁へ階子をば突ぱづしたもんですだ。

（短刀をお抜き、さあ、お殺し、殺しやうに註文がある。切つちや不可い、十の字を二つ兩方へ艸冠とやらに臼をかいて。）とお前ん、．．．葛木と云ふ字に、突いて殺せ。（名まで辛抱は出来まいが、一字や二字は堪へて見せよう。さあ早く。）と洞爺湖の雪よか眞白な肌を脱いで、背筋のつる／＼と朝日で溶けて、露の滴りさうな生々とした奴を、水淺黄ちらめかいて、柔りと背向きに突着けたですたで。

豊艶と覗いた乳首が白い蛇の首に見えて、むら／＼と鱗も透く、あの指の、あの白金が、其のまゝ活

きて出たらしいので、俺は此の手足も、胴も、じな／＼と巻緊められると、五臓六腑が蒸上つて、肝まで溶融けて、蕩々に膏切つた身體な、一氣の消えさうな薫の佳い、濕つた暖い霞に、虚空遙に揺上げられて、天の果に、蛇の目玉の黒金剛石のやうな眞黒な星が見えた、と思ふと、自然に、のさんと、二階から茶の間へ素直、棒立ちに落ちたで、はあ。」
と五十嵐傳吾は腹を揺つて、肩を揉んで、溜息して言ふ。

河岸の浦島

五十九

「其の足で、お前ん、大學に押掛けてからは、御存じの通りだ。

さあ、後の、俺が身體何う成るだね。

天人に雲の上から投落されたも、お前ん、勿體ないだが、乙姫様に海の底から突出されたも同一です。――又始めに、お孝が俺のものに成つた時は、知つたほどの誰も彼も、不斷云ふ、赤熊だことの、臍臍だことの、渾名を止めて、浦島だ、浦島だ、言つたもんで。俺も日本橋に龍宮が在る、と思つたですが。其の筈ですだね。鯨に乗つて泳ぎ込む程の不思議で無うて、熊がお孝と對座に、稲葉家の長火鉢の前に胡坐組めますまい。

見得は言はねえですぞ。國手の前だ。

死んだ嬢は家附きで、俺は北海道へ出稼中、堅氣に見込みを付けられて、中ぐらゐな身代へ養子に入つた身の上だがね。日の丸の旗を立てて大船一艘、海産物積んで、乗出いて、一花咲かせる目的でな、

小舟町へ商會を開いた當座、比羅代りの附合で、客を呼ぶわ、呼ばれもしたので、一座に河岸の人が多かつたでな。土地の藝者も顔が揃うた。二三度、其の中に、國手、お前も因果は遁れぬ、御存じですだ、瀧の家の清葉とな、別嬪が居たでねえですか。」
葛木は屹と見る。

「容色は固より、中年増でも生娘のやうな、あの、優しい處へ俺目を着けた。一睨、床の間から睨んだら、否應はあるまい哩。あゝ、爰が俺膾納臍の悲しさだ。金に成る男のぬくとみにや、誰でも帶を解くと、奥州、雄鹿島わ海女も、日本橋の藝者も同じ女だと、北海道釧路國の學問だでな。」

「一吃驚したですだ、お前ん．．．唯居りや袖も擦合ふけれども、手を出すと、富士の山の天邊あたりまで、スーと雲で退かれたで、あつと云ふと俺、尻餅を搗いたですが。」

（御守殿め、男を振るなんて生意氣な、可、清葉さんが嫌つた人なら、私が情人にして遣らう。．．

．．．．．）
此だで國手。其こそ悪く傍へよると、撥で打たれ

るぞ、と友達ともだちの衆しゅうに用心ようじんされた其そのお孝かうが、俺おれの手てを曳ひいて抱だきこ込んだでな。いや、お孝かうと來きては、對手あひての清葉きよはを驚おどろかすためには、裸體はだかで本當ほんたうの態ひくまにも乘兼のりかねねえですが。――後あとで聞きくと、清葉きよはを口説くどいて振ふられたと云いふために、お孝かうの關係くわんけいをつけたのが、一人ひとり二人ふたりでねえと云いふたで喃な。」「

葛木かつらぎは聽きいて、

「私も御多分ごたぶんには漏もれんのだせ。」

と、靜しずに衣兜かぶしに手てを入いれる。

赤熊あかぐまは星ほしが痛いたさうに、額ひたひを確しかと兩手りやうてで蔽おほひ、

「處ところが、然さうで無ない。調子てうしが違ちがうた。・・・・

誰たれも其そのきりかはり、お孝かうの口くちから、(可厭いやに成なつたら、其それツ切きり、御免ごめんなんだよ、可いいかい。)と初手しよてに念ねんを推おされて居をるで、突出つくだされて謂いふ理窟りくつは無ないだね。

そりや、随分ずぶん俺おれが身みだけでは金かねも使つかった。けれどもな、鯨にしんや數かずの子この一庫ひとくら二庫ふたくら、あれだけの女をんなに掛かけては、吹矢ふきやで孔雀くじやくだ。富籤とみくじだ。マニラの富とみが當あたらんとつて、何國どこへも尻しりの持もつて行きやうは無なえのですもの。

が、人情にんじやうは理窟りくつで無ないで。

女房も生命も、其の生命から二番目の一人の小兒
を棄てゝまでも・・・・・・・・」

「一寸・・・・・・・・」

葛木は急に遮りつゝ、

「唯聞いては居られない、・・・・・・・・お互に人の
兒だよ。お前、小兒を拾つたと云ふのは？ 構ひ
つけない、打棄つてあると云ふ意味なのかい。」

「然うでねえです。」

「人に遣つたと云ふ事かね。」

「違ふ。」

と、ぶつきらぼうに言ふ。

「棄子をしたか。」

と小さな聲。

頭を釘

六十

赤熊は、準弱として、頽然と俯向いたが、太く恥ぢたらしく毛皮の袖を引搜すと、何か探り當てた體で、むしやりと嚙む。

葛木は眉を顰めて、

「一寸、小兒も小兒だし、……前刻から、氣に成るが、兎に角、色事の達引中だ、なあ、まあ。……それに、那樣事をしてくれば不可いぢやないか。見て居られない、……何を食ふんだ。」

「はあ、此かね。」

と、食つた後の指を撮んで、けろりとした顔を上げて、氣も無い様子で、

「虱だと思つたかね、へ、違ふですが。大丈夫だで、國手。脂の抜きやうが足りんだつた處へ、寢るにも起きるにも脱がねえもんで、こりや、雨な、埃な、日向な、汗な、膏で熊の皮に湧いた蛆だよ。」

「え。」

「蟲ですがい。豪く精分の強い、補助に成る奴で、
喃。」

傳吾は厚ぼつたい口をだらりと開けつゝ、

「此が有るで、俺、此の頃では、一日二日怠けて
飯食はねえ事あるですけれども、身體が弱らん。却
つて、ほか／＼温だね。取つちや食ひ、取つちや食
ひするだ。が、あとから／＼湧くです哩。二十間の
毛皮を縫包みにして居るで、形のある中は蟲が湧く
ですだ。」

葛木は面を背けて、はつと吐かうとした唾を、清
葉の口紅と、雛の思出、控へて手巾を口に當てた。

「いやがて、お孝が狂氣に成つたも、一つは此の
蟲が因である——」

「貴下、何をして居らるゝかね。」靴を忍んで唐突に、づか／＼と寄つて聲を沈めたのは巡查であつた。

「一寸談話を。」

葛木は爾時まで、蟲に背けた面を向ける。と、星に照らして、

「や、國手ですか。」

「おゝ貴官で。」

「此の橋は妙な橋ですな。」と莞爾しながら、角燈を衝と向ける。其處に背後むきに蹲んだ奴。

「此方は、」

「舊友です。ふと此處で出會つたんです。」

「お話しなさい……失禮しました。」

「あゝ、貴官、いつぞやは――一度、更めてお目に掛りたいと思つて居ます。」

「難有う。機會を待ちます。」

と銀河を仰ぎ、佩劍の秋蕭殺として、鶺鴒の如く黒く行く。橋冷やかに、水が白い。

「夜が更ける……おい、そして、そして小兒は。」

「國手、臍腑から餌を吐くまで何事も打まけたで、小兒を棄てた處を言ふですけど、此だけは内分に願ひたいでね、極ねえ。……巡査にでも知れると成らんですた。」

「餘り、巡査に遠慮する風でもあるまいぢやないか。」

「然うでねえです。河岸の腸拾ひや、立ん坊は大獄へ入れられる。其も可えですが、唯、然う成ると、縁の下からも、お孝の聲が聞かれますだよ。」

葛木は思はず吐息した。「無論言ひはせん。」
「なら話すだがね、小兒を棄てたのは、清葉の門たで。」

「何、清葉の。ぢや、あの瀧の家で拾つて、可愛がつてると云ふ小兒は、お前のかい。」

「小兒は幸福ですだ。」
「む、幸福だ。」

と引入れられて、氣を取られた調子が高く、
「清葉が、頬摺りしたり、額を吸つたり、……」

・抱いて寝るさうだ。お前、女房は美しかったか、綺麗な兒だつて。あゝ、幸福な兒だ。可羨しいほど幸福だ。」

摺つて出るやうに水を覗く、と風が冷かに面を打つ。欄干に確と兩手を掛けた、が、熟と黙つて、やがて靜に立直つた時、酔覺の顔は蒼白い。

「私は馬鹿だよ。もし私を、假にお前の境遇に置いたとすると、其のくらゐな智慧も分別も決して無いのだ。お前は私より知識がある、果斷がある、．．．飯のかはりに、熊の毛の蟲を食つても、其れほど智慧があり、果斷もあれば、話は分らう。」

大分遅い、．．．今度の巡查は此のまゝには通らんぞ。さあ、早い處を言へ。

お前の要求は肯入れられない、二人は斷じて縁を切らない．．．」
半ば聞いて赤熊は又頹然とした。

「然う言つたら、お前は何うする、私を殺すか。」

「．．．．．」

「お孝を殺すか。」

「え、あれが殺せますほどなんですだ、お前んに、手向ひするだい。殺したい、殺したい、殺して死にたい思うても、傍へ行きや、ぱつと佳い香のするばかりで、筋も骨も萎々と、身體がはや、濕つた粘のやうに成りますたで。」

「チヨツ、確乎しないのか。お孝に手出しが出来なかつたら、切めて私を殺す、私を狙ふ計畫を立て、くれ。勇氣を起せ、張合を附ける。私が頼む。そして私にお前の言分を刎ねつけさせてくれないか。私も頼む、其の様子ぢや霽を引搦んで突返すやうで、斷るに斷り切れない。．．．．．こんな弱つた事は無いのだ。」

おい、男がものを言掛けるには、若しそれが肯入れなかつたら何うする、と覺悟を極めてかゝるのが法だ。．．．．．恥を知れ、恥を知れ。氣を判然しで出直して、切物か、刃物の齒ごたへのあるやうにして、私に斷然、（女と切れない。）と言はしてくれ。」

葛木が焦れて氣色ともに激しく成るほど、はあ／

と呼吸を内に引いて、大息で喘いだが、獣の背の、波打つ體に、くなくと成ると、とんと橋の上へ、眞俯向けに突伏して了ふ。

「お願ひですだ、拜むですたい。．．．邪魔だらば、縁の下へ突込まれうで。柱へうしろ手にはしら縛られて居ながらも、お孝の顔を見て居たいで、便所の掃除でも何でもするだ。活動寫眞で見たですが、西洋は羨しい。女の足を舐めるだあもの。犬に成つても大事ねえたで、香が嗅ぎたい、顔が見たいで、此の通り拜むだ、國手。恥も、外聞も、お孝があつての上ですだよ。」

わつと云ふと、聲を上げて、ひく／＼後を引いて泣く。

葛木は踵を刻んで、

「聞け、聞け。だが何にも言ふことが出来な

い。．．．では、お前、私がいれば、お孝は確にお前に戻るか、其の、お前に、お孝が戻ると思ふのかよ。」

「そりや、そりや戻つても戻らなくても、國手があるより増だでね、聲だけ聞くでも姿だけ見るでも、

國手と二人の時と、お孝一人の時とは、俺が心持
が何う違ふか考へずとも分るだね。拜むすだよ。
何も言はんで。・・・此、此、此の橋板に摺付
けて血を出いで願ひたいけども、額の厚ぼつたい事
だけが、我が身で分る外何にも分らん。血の出ない
のが口惜いすだ。」

と頭を釘に、線路の露の鐵を敲く。

學士はフイと居なく成つた。銀河のあたり、星が
流るゝ。

はツと聲に出して、思はず歎息をすると、浸む涙を、兩の腕。・・・面を犇と蔽うて居た。

俤の上でーもう夜半二時過。

此の辻車が、西河岸へ又ツと出たと思ふと、

「あゝ。」

葛木は慌しく聲を掛けた。

「一寸待て、車夫。」

「へい／＼。」

「忘れものをして来た、歸つてくれないか。」

「唯今、乗した處へ。」

「あゝ。」

夜延仕でも、達者な車夫で、一もん字に其の引返す時は、葛木は伏せた面を挙げて、肩を聳かす如く瘦せた腕を組みながら、切に飛ぶ星を仰いだ。が、夜露に、痛いほど濡れたかして、顔の色が眞蒼であつた。

「可し、此處でー此處でー此處でー」

と焦つて、壓へて云ひ／＼、早や飛下りさうにしつゝも駈戻る發奮にづか／＼と引摺られるやうに町の角を曲つて、漸と下立つた處は、最う火の番を過ぎて、お竹藏の前であつた。

直ぐに稲葉家の露地を、ものに襲はれた體に、慌しく、其の癖、靴を浮かして、跽音を密めて、した／＼と入ると、門へ行つた身を翻して、柳を透かしながら、聲を忍んで、二階を呼んだ。

「お孝さん、・・・」

寂然として居たが、重ねて呼ぶのに氣を兼ねる間も無く、雨戸が一枚、すつと開いて、下から映す蒼い瓦斯を、逆に細流を浴びた如く濡萎れた姿で、水際を立て、其處へお孝が、露の垂りさうに艶麗に顯れた。

が、其は浴びるばかりの涙なのである。

唯、見る時、葛木も面にはら／＼と柳の雫が、押へあへず散亂るゝ。

今宵は三度目である。宵に来て、例の如く河岸まで送られて十二時過に歸つた時は、夢にも憚うとは

知らなかつた。――石橋で赤熊に逢つて、浮世を
おもひす思捨てるばかり、覺悟して取つて返した時は、もう
せけん世間も此處も寢靜まつて居た上に、お孝は疲れた、
そして酔つても居た。

途中送る折も、送る女が、送らるゝ男の肩に、な
よ／＼と顔を持たせて、

「邪慳だね、歸るなんて。」

ぐつすり寐込んだに相違ない。えゝ、決心は鈍ら
うとも、まゝよ、此の次に、と一度引返さうとして、
たゞ、口ずさみのひとりでに、思はず、

「お孝……」

と呼ぶと、

「あい。」と聲の下で返事して、階子を下りるの
がトン／＼と引摺るばかり。日本の眞中に、一人、
此の女が、と葛木は胸が切つたのであつたが。

暖い閨も、石の如く、砥の如く、冷たく堅く代る
まで、身を冷して涙で別れて……三たび取つ
て返したのが此時である。

お孝は、亂書の假名に靡く秋風の夜更けの柳にの
み、ものを言はせて、瞳も頬も玉を洗つたやうに、

よろ／＼と唯俯向いて見た。

「濟まないがね、――人形を忘れたから。」

「はい。」

と清く潔い返事と、ともに、すつと入ると、向直つて出た。乳の下を裂いたか、とハツと思ふ、鮮血を滴らすばかり胸に据ゑたは、宵に着て寝た、緋の長襦袢に、葛木が姉の記念の、あの人形を包んだのである。

ト片手ついたが、欄干に、雪の輝く美しい白い蛇の絡んだ俤。

「お怪我の無いやう・・・御機嫌よう。」

とはらりと落とすと、袖で受けたが、さらりと音して、縮緬の緋のしぼは、鱗が鳴るか、と地ににっつて、潰島田の人形は二片三片花を散して、枝も折れず、花柳の葉末に手に留んぬ。

「清葉さん、――然やうなら。」

カタリと――一幅、黒雲の鎖したやうな雨戸が閉つて、・・・

――露地の細路、駒下駄で――

と心悲しい、が冴えた聲。鈴を振る如く、白銀の、
あの光、あけの明星か、星に響く。
葛木は五體が窺んだ。

稻荷堂の、背裏から、もぞ／＼と這出して、落ち
た長襦袢に掛つて、両手に掴んだ、葛木を仰ぎ見て、
夥多たび押頂いたのは赤熊である。

車夫の提灯が露地口を、薄黄色に覗くに引かれて、
葛木はつか／＼と出て、翻然と乗ると、楫を上る。
背に重量が掛つて、前へ突伏すが如く、胸に抱いた
人形の顔を熟と視た。

其の翌年の春である。日本橋通三丁目の角で、
 電車の印を結んで、小兒演技の忠臣義士を煙に巻い
 て、姿を消した旅僧が、胸に掛けた箱の中には、同
 じ島田の人形が入つて居たのである。

生理學教室三昧の學士も、一年ばかりお孝に馴染
 んで、其の仕込みで、一寸大高原吾ぐらゐは玩ぶこ
 とが出来たのである。

却説、葛木法師の旅僧は遠くも行かず、何處で電
 車を下りて迂廻したか、多時すると西河岸へ、船か
 ら上つた如く飄然として顯れて、延命地藏尊の御堂
 に詣で、禮拜して、飲酒家の伯父さんに叱られたや
 うな形で、あの寶頭盧の前に立つて、葉山繁山、繁
 きが中に、分けのぼる峰の、月と花、清葉とお孝の
 名を記にした納手拭の、一つは白く、一つは青く、
 春風ながら秋の野に葛の裏葉の翻る、寂しき色に出
 で、戦ぐを見つゝ、去るに忍びぬ風情であつた。

茶を振舞つた世話人の間に答へて、法體は去年の大晦日からだ、と洒落で無く眞顔で云ふやう、

「いや、夜遁げ同然な俄發心。心よりか形だけを代へました青道心でございます。面目の無い男ですから笠は御免を蒙ります。．．．何處と申して行く處に當は無いので、法衣を着て草鞋を穿くと、直ぐに兩國から江戸を離れて、安房上總を諸所經歷りました。．．．今日は、藥研堀を通つて此方へ。――今度は日本橋を振出しに、徒歩で東海道に向ひますつもり。――以來は知らず、何處へ參つても、此のあたりぐらゐ、名所古蹟はございません。

と云つて、ほろりとして、手を擧げて茶盆を頂いて出て行く。

人足繫き夕暮の河岸を、影のやうに、すた／＼と抜けて、それからなぞへに橋に成る、向つて取附の袂の、一石餅とある淺黄染の暖簾を潜つて、土間の縁臺の薄暗い處で、折敷装の赤飯を一盆だけ。

其癖、新しい銀貨で釣錢を取つて一石橋へ出た。

もう日が暮れたのである。

半ば渡つた處、御城に向いた、欄干に、松を遠く、船を近くイんで、凭掛つたが、熟として頼杖を支いて、人の往來も世を隔てた如く、我を忘れた體であつた。

「然やうなら。」

と一言掛けて、發奮むばかりに身を翻すと、其處へ、ブンと來た電車が一輛。目前へガラ／＼と打つかりさうなのに、あとじさりに壓され、壓され、煽られ氣味に蹠踉々々と成つた途端である。

「火事だ、火事だ。」

把手を控へて、反身に成つた車掌が言つた。其の帽の、庇も顔も眞赤である。

黒い水の、箱を溢るゝばかり、乗客は總立ちに硝子に犇めく。

驚いて法師が、笠に手を掛け、振返ると、龜甲形に空を劃つた都會を装ふ、鎧の如き屋根を貫いて、檜物町の空にニと立つ、偉大なる彗星の如き火の柱があがつて、倒に迸る。

「瀧の家だい。」

其の見當とも言はず、……殆ど直覺的に、清葉の家を、耳の傍で叫んで、――前刻から橋の際に腰を板に附いて蹲んで居た、土方體の大男の、電車も橋も搔退けるが如く、兩手を振つて駈出したのがある。

旅僧は、其の聲を、聞いたやうだ、と思つたらう。しかし其の時、熊の皮は着て居なかつた。

此は、清葉とお千世が、此の日、稻葉家へ入らうとして、其の露地から出て、二人を見て逃げるのを知つた、のツそり頬被をした晝の影法師と同じ風體の男である。

綺麗な花

六十四

「危えッ！」

危え、と藏の屋根から、結束した消防夫が一人、棟はづれに乗出すやうにして、四番組の纏を片手に絶叫する。

其の下に、前と後を、おなじ消防夫に遮られつゝ、口紅の色も白きまで顔色をかへながら、かゝげた片褻、跣足のまゝ、宙へ乗つて、前へ出ようと身をあせるのは清葉であつた。

「放して、放して。」

此の土藏一つ、細い横町の表から引込んだ處に、不思議なばかり、白磨の千本格子がびたりと閉つて、寢静つたやいうに音もしないで、たゞ軒に掛けた瀧の家の磨硝子の燈ばかり、瓦斯の音が轟々と、物凄

い音を立てた。

「藏は大丈夫だ。姐さん、危い。」と又屋根から呼ばゝる。

取巻く、人數が、

「退いた、退いた、退いた。」と叫ぶ。

薄藤色の出の衣服の、肩を揉んで身をあせる、火の粉は紅梅の如く衣紋を切つて散るのである。

「藏ぢやない、藏の事なんかぢやないんだよ。」

「箆笥は出したい。出来るだけ出した。」

「内の人たち。」と、清葉は最う聲が洶れる。

「乳母は、湯に入つて居た處だ、裸體で遁げた。」

「娘さんも小婢も遁がした。下女どんは一所に手

侍つた。」

「何しろ火が疾い。然も火元が裏家の二階だ。」

と口々にがや／＼言ふ。

「其の二階におつかさんが。」

「何、阿母が。」

「坊やが、坊やが。放して、放して。」

と云ふと、思はず壓へたのが手を放す。

「了つた。」と屋根で喚く。

二人ばかりドンと出て格子戸に立つたのは、飛込まうとしたのでは無い。血迷ふばかりの、清葉を遮

つて、突戻すためであつた。

清葉は、向うから突戻されてよろ／＼と、退ると、
唧筒の護謨管に裳を取られてばつたり膝を、其の消
えさうな雪の頸へ、火の粉がばら／＼とかゝるので、
「一人が水びたしの半纏を脱いで掛けた。

此の折から、此處の横町を河岸へ出る、角の電信
柱の根を攀ぢて、其處に積んだ材木の上へ、すつくと
立つて顯れた、旅僧の檜木笠は、兩側の屋根より
高く、中根の如き松明の炎に照されたが、群集の肩
を踏まないでは、水管の通つた他に、一足も踏込む
隙間は無かつたのである。

「筒先ウ向ける。」

「手向の水だい。」

其處に絶望の聲を放つと、二條ばかり、筒先を格子
子に向けた。

どゞどツと鳴る音と共に、軒の瓦斯は、人魂の如
く屋根へ飛ぶ。格子が前へどんと倒れる。地獄の口
の開いた中から、水と炎の渦巻を浴びて、黒煙を空
脛に踏んで火の粉を泳いで、背には清葉の繼しい母
を、胸には捨てた（坊や。）の我兒を、大肌脱の胴

中へ、お孝が……葛木に人形を包んで投げた
を拾って持った、緋の長襦袢を繩からげにぐい、と
結んで、

「おう！」

とばかり呻って出たのは赤熊である。

「助かった。」

「助けた。」

錦の帯は煙を拂つて、龍の如く素直に立つ。母は
其の手に抱寄せられた。

「坊や。」

と清葉が手を伸した時、炎の流は格子戸の倒れた
穴を、堰を切つた堤の如く、九ツの頭を立て、漲り
流るゝ。

「まあ、綺麗に花が咲いた事。」

一町、中を置いた稲葉家の二階の欄干に、お孝は、
段鹿子の麻の葉の、膝もしどけなく頬杖して、宵暗
の顔ほの白う、柳涼しく、此の火の手を視めて居
た。……

「此の勢だ、此の勢だ。」

振向く處を人雪類打つ中を、まるで夢中で、

「人一人助けたぞい。此の勢なら殺せるたい。お

孝、畜生。」

眼は火の如く血走りながら、厚い唇は泥の如く緊
なく緩んで、ニタ／＼と笑ひ／＼、足許ふら／＼と
虚空を睨んで、夜具包み背負つて。ト轉倒がる女を
踏跨ぎ、硝子戸を立て、飛ぶ男を突飛ばして、ばた
／＼と破つて通る。

「此の勢だ、殺せるたい。」

火の盛なる頃なれば、大膚脱ぎを唯一人目に留る
者も無く、のさ／＼と墓の歩行みに一町隣の元大
工町へ、づゝと入ると、火の番小屋が、あつけに取
られた體に口を開けてポカンとして、散敷いた櫻の
路を、人の影は流るゝやう。．．．半鐘の響、
太鼓の音、ぱつ／＼と燃ゆる音、べら／＼と煙の響、
もの音ばかり凄しく、兩側の家は唯、黒い墓の如く、
寂しいまでにひそまり返つて、唯處々、廂に眞赤な

影は、其處へ火を呼ぶか、と凄いのである。
洪と鳴つて新しい火の手が上ると、魔が知らすやうな激しい人聲。わつと喚いて此の町も危く成つたが、片側の二階からドシノ、投出す、衣類、調度。

ト諸君はお竹藏と云ふのを御存じの筈と思ふ。あの屋根から、誰が投げて、何のがらくたに交つたか、二尺ばかりの蠟鞘が一振。蛇の如く空に躍つて、丁ど其處へ來た、赤熊の額を尾でたゝいて、八々と落ちた。

發奮で打つたか。前刻瀧の家の二階で受けた怪我の、氣の勢で留まつて居たか。此の時、額から垂々と血が流れたが、其には構はないで、殆ど本能的に、胸へ抱いた年弱の三歳の子を兩手で抱へた。

が、慌しく刀を拾ふと、何を思ふ隙も無さうに、ギラリと冷かに披いて、鞘を棄てゝ提げたのである。其のまゝ襲入つた、向うの露地口には、八九人立したが、眞中をずつと通るのに、誰も咎めたものが無い。

柳に片手を、柄下りに、抜刀を刃尖上りに背に隠

して、腰をづいと伸して、木戸口から格子を透かすと、丁ど梯子段を錦繪の抜出したやうに下りて、今、長火鉢の處に背後向きに、すつと立つた、段染の麻の葉鹿の子の長襦袢ばかりの姿がある。

がらりと開けると、づか／＼と入るが否や、

「畜生！」

振向く處を一刀、向うづきに、グサと突いたが脇腹で、アツと殆ど無意識に手で疵を抑へざまに、弱腰を横に落す處を、引なぐりに最う一刀、肩さきをかツと當てた、が、それは引かき疵に過ぎなかつた。刃物の鍛は生鐵で、刃は一度で、中しやくれに曲つたのである。

「姐さん、ー」

蟲が知らしたか、も、う一度、

「お爺さん。」と呼ぶと齊しく、立つて逃げもあへず、眞白な腕をあはれ、嬰兒のやうに虚空に投げ、身を悶えたのは、お千世ではないか。

赤熊は今日も附狙つて、清葉が下に着た段鹿子を目的に刃を當てた。このお千世の着て居たのは、し

かし其では無く、．．．清葉が自分のを持して
寄越したのであることを、此處で言ひたい。

「一寸、お茶を頂きに。」

清葉の眉の上つたのを見て、茶の罐をたく叔母
なるものは、香煎でもてなすことも出来ないで、陰
氣な茶の間が白けたのであつたが。――

あはせかゞみ

六十六

「これは、入らつしやいまし。」

其處へ、お千世に介抱されつゝ、二階から下りて來たお孝が、儀式正しく、ぴたりと手を支いて挨拶をした。肩の位に、大客を恐れない品格が備はつて、取亂した人とは思はれなかつた、が、清葉も改めて會釋をする時、其は誰にするのやら分らないことを悟つた。

「入らつしやいまし。」

今度は澄まして在らぬ方の、店を向いて手を支いたのである。

「お孝さん、分りますか。」

清葉は聲を曇らしながら、二階で弄んで欄干越、柳がくれに落したのを、袖で受けて膝に持つた、銀地の舞扇を開いて立つて、長火鉢の向う正面に、縁起棚の前にきらりと翳すと、お孝が、肩を落して、仰向いて見つゝ、

「お月様でせう。――大事のお月様雲めがかくす。――とても隠すなら金屏風で、」

と唄ふかと思へば、

「おほ、寒い、おほ寒い、もう寝ようよ。」
と身ぶるひをする。

お千世が、其の膝を抱くやうに附添つて、はだけて、乳のすくお孝の襟を、搔合せ、搔合せするのを見て、清葉は座にも着きあへず、扇子で顔を隠して泣いた。

背後へ廻つて、肩を抱いて、

「お大事になさいよ、静にお寝みなさいまし、お孝さん、一寸お千世さんを借りますよ。――お座敷にして。」

と顧みて、あとは阿婆に云つた。

「から、意氣地も、だらしも有りませんやね、我まゝの罰だ、業だ。」

と時々刻んで呟いた阿婆が、お座敷と聞くと笑傾け、

「そらよ、お千世や、天から降つたやうな口が掛つた。さあ、着換へて、」

直ぐに連れて出ると心得た阿婆が、他には無い、お孝の亂心にゆかしがつて着て居た、其の段鹿子をお孝の帯に手を掛けて、かなぐり取らうと爲たのである。

「叔母さん、まあ、」

とお千世はおろ／＼。．．．

「失禮をいたします。」と、何の事やら又慇懃に、お孝が、清葉に手を支いたのは涙ならずや。

「これが可厭なら、よく稼いで、可い旦那を取つてな、貴女方を、」

と、清葉を願、

「見習つて幾枚でも拵へる、其處を退かぬかい。」と突退ける。

「お待ちなさいまし。」

凜と留めて、

「切火を打つて、座敷へ出ます、藝者の衣物を着せるには作法があるんです。．．．お素人方には分りません、手が違ふと怪我をします。貴方、お控へなさいまし。――千世ちゃん、今（箱さん。）

を寄越すから、着操へないでいらつしやいよ。姐さんを氣をつけて。お孝さん、「何も知らず横を向いたお孝に、端正と手を支いて、

「然やうなら。――二人で、一度あはせものをしませうね。」

と目を手巾で押へて歸つた。……

襦袢は故と、膚馴れたけれど、同一其の段鹿子を、別に一組、縞物だつたが對に揃へて、其は小女が定紋の藤の葉の風呂敷で届けて來た。

箱屋が來て、薄べりに、紅裏香ふ、衣紋を揃へて、長襦袢で立つた、お千世の、うしろへ、と構へた時が、摺半鐘で。

「木の臭がしますぜ、近い。」

と云ふと、箱三の喜平はひよいと――飛。阿婆も續いて駈出した。

お千世の斬られた時、衣物は其處に其のまゝである。

「違つた、お千世だい。」

と、矢張りニタノと笑ひながら、目を据ゑて階子段を見上げた時。・・・あゝ、一足遅矣。

お千世の祖父の甚平が臺所口から草鞋穿の土足である。――此が玄關口から入つたら、或は恚うは無かつたらう。――爺さんは、當夜植木店のお薬師様の縁日に出た序に、孫が好きだ、と草餅の風呂敷包を首に背負つて、病中ながら豫て抱主のお孝が好いた、雛芥子の早咲、念入人に土鉢ながら育てたのを丁寧に両手に抱いて、来て、途中頭の上の火事に慌てながら、驚破や見舞、と駈込んで、臺所口へ廻つたのが、赤熊と一足違ひ。

泥鉢は一堪りも無く踏潰された。恰も甚平の魂の如くに挫けて、眞紅の雛芥子は處女の血の如く、めら／＼と颯と散る。

熊は山へ歸る體に、のさ／＼と格子を出た。

ト、敵を追つて捕へやう擬勢も無く、お千世を抱いて、爺さんの腰を抜いた、其の時、山鳥の翼を弓に番へて射る如く、颯と裳を曳いて、お孝が矢のやうに二階を下りると思ふと、

「熊の蛆め、畜生。」と追継つて衝と露地を出た。が、矢玉と馳違ひ折かさなる、人混雑の町へ出ると何しに來たか忘れたらしく、こゝに降かゝる雨の如き火の粉の中。袖でうけつゝ、手で招きつゝ、

「花が散るよ、散るよ。」と蹴出しの淺黄を踏くゞみ、其の紅を捌きながら、ずる／＼と着衣を曳いて、

「おほ、冷い、おほ、冷い。．．．雪やこんこ、霰やこんこ。．．．おほ綺麗だ。花が散るよ、花が散るよ。」

仲通の小紅屋の小僧は、張子の木兎の如く、目を光らして一すくみに成つた。

火の影ならず、血だらけの抜刀を提げた、半裸體の大漢が、途惑した幟の繪に似て、店頭へすつくと立つと、會釋も無く、持つた白刃を取直して、切尖で、づぶりと其處にあつた林檎を突刺し、敵將の首

を擧げたる如く、づい、と掲げて、風車でも廻す氣か、肌につけた小兒の上で、くるり／＼とかざして見せたが、

「あはゝ。」と笑ふと、ドシンと縁臺へ腰を掛ける、と風に落ちて来る燃えさしが人よりも多い火の下店頭で、澄まして林檎の皮を剥きはじめた。

小僧は土間の隅に宛然のからくり。お世辭ものゝ女房が居たらば何と云はう。其は見えぬ。

「坊主、咽喉が乾いたらうで、水のかはりに、好きなものを遣るぞ。おほ、女房に肖如だい。」

ニヤ／＼と又笑つたが、胡瓜の化けたらしい曲つた刀が、剥きづらかつたか、あはれ血迷つて、足で白刃を、土間へ壓當て踏延ばして、反を直して、瞳に照らして、持直す。目の前へ、すつと来て立つたのはお孝である。

「刀をお貸し。」

黙つて袖口を、なぞへに出した手に、はつと、女神の命に従ふ状に、赤熊は黙つて其の刀を渡した。

「おゝ、嬉しい、剃刀一挺持たせなかつた。」

と、手遊物のやうに二つ三つ、睫を放して、ひら／＼と振つた。

眦を返す、と亂るゝ黒髪。

「覚悟をおし。」と、澄まして一言。

何か言ひさうにした口の、唯またニヤ／＼と成つて、大な涎の滴々と垂るゝ中へ、素直にづきんと刺した。が、齒にカツと辻つて、唇を決明果の如く裂きながら、咽喉へはづれる、其の眞中、我と我が手に赤熊が兩手に握つて、

「うゝゝ、いうゝ！・・・抉れ、抉れ、抉れ、抉れ。」

懷中をころがる小兒より前に、小僧はべた／＼と土間を這ふ。

「了つた。」

手を壓へたのは旅僧である。葛木は、人に揉まれて、脱け落ちた笠のかはりに、法衣の片袖頭巾めいて面を包んだ。

「お孝さん。」

「先生。」

と、忘れたやうに柄を離すと、刀は落ちて、赤熊は眞仰向けに、腹を露骨に、のつと反る。

お孝の彼を扶つた手は、こゝに唯天地一つ、白き蛇の如く美しく、葛木の腕に絡つて、潜々と泣く。

葛木は尚ほ縋る袖をお孝に預けたまゝ、跪いて悶絶した小兒を抱いた。

駈着けた警官の中に笠原信八郎氏が有つた。

「葛木・・・更めてお目にかゝります。・・・見苦しくなく支度をさせます。此女の内まで

お見免しが願ひたい。」

「諸君。」

信八郎氏は言下に云つた。

「私が責を負ひます。」

警官は二隊に分れた。

お孝は法衣の葛木に手を曳かれて、静々と火事場を通つた。裂けた袂も、宛然振袖を着た如くであつた。

火の番の曲り角で、坊やに憧れて來た清葉に逢つ

た。

「あゝ、お地藏様。」

夢かとはばかり、旅僧の手から、坊やを抱取った清葉は、一度、継母とゝもに立退いて出直したので、凜々しく腰帯で端折つて居た。

お孝は、離さじ、と唯黙つて葛木に縋る。

「や、此處にも一人。」

警官は驚いた。露地の出口の溝の中、さして深くも無い中に、横倒れに陥つて死んで居たのは茶罐婆で、胸に突疵がある。ニは赤熊が片附けた。

此が爲に、護送の警官の足が留つて、お孝は旅僧と二人、可懐しさうに、葉が差覗く柳の下の我家に歸る。

清葉の途中で立停つたのを見て、お孝が判然した聲で云つた。

「姐さん、遺言を聞いて下さい。」

「はい。」

と答へた。二人は柳の軒燈に、清葉は其時、羽目について暗く立つた。

「お孝さん、藏も今しがた落ちました。」
と云つて、實際目ぬりが届かないで、助つたつもの藏、中には能衣装までであると傳へた。が開いたのであつた。

坊やを胸に、すつと出て、

「身に代へまして、清葉が、貴女に成りかはつ

て。」

其時三人が皆泣いた。

「お千世さんは、」

「あゝ、お千世。」

餘りの事に呆果てゝ、三人は茫然とした。中にも旅僧は何をトツチたか、膝で這廻つて、雛芥子の散つた花片の、煽で動くのを、美しい魂を散らすまいとか、胸の箱へ、拾ひ込み／＼したのである。

信八郎氏が先づ一人で入つて来た。

お孝は胸に抱いて仰向けに接吻して居た、自分のよりは色のまだ濡々と紅な、お千世の唇を放して、
「お湯を頂きまして可うござんすか、旦那。」
と信八郎氏に手をついて言ふ。

渠は擧手の禮を返して、

「御随意に、盃をなすつて可い。」

茶棚に背後向きに成つた肩を拊つばかり、ハタと
其處へ、縁起棚から輝いて落ちたのは、清葉が、前
に翳したまゝ其處にさし置いた舞扇で。

ふと此に心根いたらしく、立つて頂いて、同じ縁
起棚から取つた小さな紙包み、（同妻。）の手巾の
端を、湯呑に落して素湯を注いだ、が、何にも言は
ず、かぶりと飲むと、茶碗酒が得意の意気や、吻と
小さな息をした。其の中に黒子を扱いた時の硝酸が
入つて居た。

「姐さん、遺言を聞いて下さいな。」

「生命に掛けます、お孝さん。」
其時、舞扇を
開いた面は、銀よりも白ずんだ。

お千世は玉の緒を繋ぎとめた。

葛木が、生理學教室に歸つたのは言ふまでもない。
留學して當時獨逸にあり。

瀧の家は、建つれば建てられた家を、故と稲葉家

のあとに引移つた。一家の美人十三人。
清葉が盃を擧げて唄ふ、あれ聞け横笛を。

——露地の細路駒下駄で——

【完】